

#### 第四章・葬送儀礼における芸能の諸相

##### 1. はじめに

今まで巫女、修験道、神楽における神がかりを現状的な事例を中心にその概略をみてきた。そのなかで、一つ共通点が発見できる。神がかりの神霊が死霊、童子、祖先霊、或いはそれに準じる神などである。即ち、人格性が濃い存在としての神霊なのである。岩田勝は古記録の例をあげて、「カカル」は、普通名詞としての神、神明のように神の名が付いてない一般の神の場合用いられていて、「ツク・ヨル」は、神の名がついている特定の神、そして限定的に使われた（注1）という。しかし、今現に行なわれている神がかりは一般名詞としての神霊ではなく、祭る人と特別な関係を持つ神霊、人格性が強い神霊であることがうかがわれる。神がかりはかつて一般の神霊、特定の神霊にかかわらず行なわれてきたが、一般の神霊としての神がかりはなくなって、人と特別な関係を持つ神霊、人に親しまれている人格性が濃い神霊の場合のみ、神がかりが残るようになったといえるのではないだろうか。今日神楽おいての神がかりが中国地方以外には見ることが出来ないその理由として、石塚尊俊は中国地方の神楽があまりにも芸能化が進んで、かえって古い形態を残そうとする意識が働き、今日のように神がかりが中国地方に残るようになったという。（注2）又、他の地域の神楽に神がかりが残らぬようになったのは中国地方の法者のような活動がなかったことと、さらに唯一神道あるいは復古神道を司る神職が、神がかり・託宣を払拭するのに力があつたためと考えられる（注3）。しかし、神がかりに関わる人々の外部的要因も否定できないが、神がかりの本質から迫って行く必要があると思われる。

中国地方に神がかりが残るようになった理由をその祀られる神が、最も人間に親しまれる神、即ち元々は人間だったが、死んだ後その魂が神格化された祖先神が神がかりの主神として今日残されるようになっていく。個性が強く安定していない、しかも荒ぶる神を祖先霊への昇華させるために行なわれたが荒神神楽であるという指摘も注目される（注4）東北地方のイタコやゴミソ、オカミサン達の儀礼のなかでも託宣（口寄せ）が見られるのは確かに死者の霊であることである。オシラアソバセのようにその神の

神格化が進むにつれ託宣が語り物に近いことになっていく過程が想定される。神がかりは神の意思を得るための手段である。神霊の意思を伺う手段は神がかりに限らない。様々な占いの手法をも使う。小銭を投げたり、御幣にヒトカタの切り紙を吊り上げたり、米占いなどが行なわれる。そのなかでも、最も積極的な手段が託宣である。一般人が聞き取れる場合もあるが、専門宗教者出なければ聞き取れない場合もある。ともかく言葉（託宣）というのは人間営みの産物であるだけに、託宣の主体である神霊はもつとも人格的であるといえるのではなからうか。

神楽において神がかりが今日残っているのは石見の大元神楽の大元神や備中、備後神楽の荒神様はいずれも本来は血縁共同体の祖先神であったことはよくいわれている。

勿論祖先神だからといって、人間に近い存在とはいえないが、神楽は祖先神加入儀礼としての性格から祖先に対する観念の保守性をみることができると思われる。神楽の一つの特性として死霊祭との関連性がうかがわれる。死霊はまだ神格まで昇華されていない、死ぬ前の人間に近い、人格を保つ存在としての死霊を位置付けてきたと考えられる。即ち、死霊に対する観念には保守性が強いことがうかがわれる。その死霊を対象にする儀礼が葬送儀礼である。小論はその葬送儀礼と神楽の関係について考えてみたい。葬送儀礼と神楽との関係の問題は神楽の本質にも関わる大きなテーマである。ここでは死霊祭と芸能との関係、特に、神楽と葬送儀礼の関わりについて述べることにする。

神楽と葬儀との関係についての既存の論考は大きく二つに分けることができる。一つは葬儀が歌舞を伴うことから、神楽のみならず芸能の起源を探る方向である。もう一つは早くから注目された鎮魂の問題である。鎮魂の意味が魂を押さえることか、再生させることなのかという鎮魂の本義とかわかる。五来重は日本宗教文化の根源は葬制にあり、神楽と葬制史と芸能史の接点に位置付けられる(注5)といい、記紀や倭人伝などに見られる葬儀の際行なわれた歌舞こそ神楽の原点であると指摘している。鎮魂の問題は韓国巫覡儀礼から見た宮廷の御神楽―園・韓神祭と鎮魂祭を中心に―で言及したことがあるので、ここでは、葬儀の際行なわれる芸能について既存の報告から探ってみることにする。

## 2. 葬送儀礼と芸能

神樂が葬送儀礼としてかつて行なわれたという記録はあるが、現在行なわれている処はないという。葬送儀礼としての神樂については牛尾三千夫が石塚勝太郎翁から聞いた話(注6)と、松浦康麿が文献資料として報告した葬祭神樂(注7)、西角井正慶と倉林正次による論考(注8)があるが、何れも隠岐島の過去の葬祭神樂に関するものである。本田安次は全国の神樂を分類、報告したなかに葬祭神樂、菩提神樂、靈祭神樂などと呼ばれる神樂がかつてあったことを報告しているが、(注9)詳しい事情はわからないという。五来重は神樂の起源を葬送儀礼に求めて、神樂と葬送儀礼について論じている。(注10)現在においても神樂についての定義が様々な説がなされ、神樂という用語で多種多様な神樂の現象を説明しきれないことも、なくなってしまう葬儀との関連が排除されたことも一つの要因になったと思われる。

今日、日本では、葬儀の際神樂または、それに準ずる芸能が行なわれることはないようであるが、神樂ではないが、葬儀に歌舞音曲が伴ったことは早くから指摘されている。

日本古代史に関する最古の史料とされる『魏志倭人伝』には「其の死には棺槨は有るも槨は無く、土を封じて冢を作る。始め死するや停喪十餘日、時に当りて肉を食わず、喪主哭泣し、他人就いて歌舞飲酒す。己に葬れば、家を挙げて水中に詣りて澡浴し、以つて練沐の如くす。」(注11)とある。

『後漢書倭伝』にも「其の死には停喪すること十餘日、家人哭泣し、酒食を進めず、而して等類就いて歌舞し樂を為。」(注12)したのである。

『隋書倭国伝』には「死者は斂(おさ)むるに棺槨(かんかく、そとほこ)を以つてし、親賓、屍について歌舞し、妻子兄弟は白布を以つて服を製す。貴人は三年外に殯(もがり)し、庶人は日を卜して瘞(うず)む。葬に及んで屍を船上に置き、陸地之を牽(ひ)くに、或は小輦(よ、くるま)を以つてす。」(注13)とある。喪主や遺族泣き、弔問客が歌舞飲酒したことがわかる。

『日本書紀』神代上の火の神を産むとき焼かれて死んだ伊弉冉尊についての一書に「伊弉冉尊、火神を生む時に、灼かれて神退

去りましぬ。故、紀伊国の熊野の有馬村に葬りまつる。土俗、此の神の魂を祭るには、花の時には亦花を以て祭る。又鼓吹幡旗を用て、歌ひ舞ひて祭る。」(注14) というように鼓、笛などが奏され、歌と舞が伴ったことがわかる。ここでいう幡旗は韓国の伝統葬儀に見られる挽章旗(死者を哀悼して作った詩などの文書を木綿や紙に書いて旗のようにつくり、喪輿の野辺送りの行列に加わる。)のように多くの旗が使われたことがわかる。

又『日本書紀』卷第十三允恭天皇条には「四十二年の春正月の乙亥の朔戊子に、天皇崩りましぬ。時に年若干。是に、新羅の王、天皇既崩りまいぬと聞きて、驚き愁へて、調の船八十艘な、及び種種の樂人八十を貢上る。(中略) 且種種の樂器を張へて、難波より京に至るまでに、或いは哭き泣ち、或いは儼ひ歌ふ。遂に殯宮に参会ふ。」(注15) と見える。新羅の弔使はその年の一月に帰ったという。樂人八〇といわれるほど歌舞を伴う大規模な弔問であったことがわかる。また、天武天皇が元号を改めた朱鳥元年九月丙午(九日)に崩御されたときにも、殯宮を南庭に立て、次々と弔問が行なわれたが、その中に、百済の王良虞が父親の善光の代わりに弔問したのである。続いて、「次に国々の造等、参赴るに随ひて、各誅る。仍りて種種の歌儼を奏る。」とあり、その弔問はさらに続き持統天皇元年には、天武天皇の殯宮に「次に梵時衆発哀る。是に、奉膳紀朝臣真人等、奠奉る。奠畢へて、膳部、采女等發哀る。樂官奏樂」したのである。殯(もがり)の期間中の樂官奏樂は、雅樂寮などの国の音楽機関が歌舞音曲を担当したことがわかる。(注16) 持統天皇二年(六八八)四月条には「草壁皇子、公卿、官人、隣国の賓客を率いて天武天応の殯宮へ行き、慟哭す。この折楯伏舞が奏せられる」とあり、楯を採物にした舞が行なわれた。楯伏舞については『令集解』卷四「職員令」にその様子をうかがうことができる。「楯伏舞十人、五人土師宿禰等、五人文忌寸等。右着甲並持刀楯」とし、方相氏のよりに甲を纏い、刀と楯をもって舞ったのである。上述した樂官奏樂ということも、楯伏舞であったかも知れない。『続日本紀』天平勝宝四年四月九日条に東大寺の大仏開眼の時、雅樂寮及び諸寺の音楽が奏されたことが記されているが、五節舞、久米舞、などとともに楯伏舞が見える。『東大寺要録』卷二「供養草」第三によると、大仏供養の折は四〇名の楯伏舞が行なわれたのである。

『古事記』には天孫降臨に先だつて葦原中国に降りた天若日子はいつまでたつても帰つて来ない(複奏せず)ので、次に問責の使者として雉(鳴女)を送つたが、天若日子の弓矢で殺されてしまう。天若日子が射た矢は雉の胸を通つて天国(天安河)まで届



いたのである。天の高木神はその矢を察し、矢を返したのである。返された矢に射されて天若日子は死んだのである。若日子の妻である下照比売の泣く声を聞き、父である天津国玉神は妻とともに降りてきて悲しみ、「乃ち其処に喪屋を作りて、河雁を崎佐理持と為し、鶯を掃持と為し、翠鳥を御食人と為し、雀を碓女と為し、雉を哭女と為し、如此行ひ定めて、日八日夜八夜を遊びき。」(注17)するのである。「日八日、夜八夜を遊びき」は『日本書紀』では「而八日八夜、啼哭悲歌。」になっている。昼夜八日間歌舞をしたことである。即ち、八日間は『魏志倭人伝』や『後漢書倭伝』に見える喪の期間であろう。その喪の期間中歌舞が行なわれたのである。古代朝廷で大喪の際などに殯の神事に奉仕する職を遊部と言っている。それから、天若日子の殯期間中の「遊び」と、神楽を「神遊び」とも言われた史実とは無関係ではなからう。遊びは管弦歌舞のことで鎮魂と解釈されるのも神楽が葬儀と深い関係があったことは十分考えられる。ここでも、鎮魂の概念について振り説と鎮め説が大きく関わっている。今日葬式の際に神楽を行なうことはほとんど観られないが、渡辺伸夫の報告(注18)によると、梶尾神楽に祝子がなくなると、出棺の前に「壺神楽」を舞ったという。詳しいことはわからないが、その報告に限り考えるなら、生前に神楽に奉仕した祝子に限り「壺神楽」が行なわれたということは現代的な感覚では、祝子を偲ぶ意味での神楽の式三番の一演目である「壺神楽」を舞ったように思われる。しかし、過去には祝子のみならず、一般の人の場合でも葬儀の際神楽が行なわれた可能性も否定できない。隠岐の例や本田安次が報告した葬祭神楽、菩提神楽など、今まで報告された事例を中心に仮に葬式神楽と、霊祭神楽に分けて整理してみる。葬式神楽というのは死直後の葬送儀礼の一部として行なう神楽とし、霊祭神楽は死後数ヶ月または、数年経つてからの神楽と分けて記す。神楽(歌舞音曲)を行なう時期を基準に分ける理由は、鎮魂の意味を明らかにするに重要な手がかりになるからである。

#### (1) 葬式神楽

死直後から出棺し墓を作るまでの一連の行事が葬式である。葬式の際行なわれる神楽がある。死者との別れを悲しみ、死者を甦らせようとする人情も十分考えられるが、実際には如何なるものであろうか。まず、葬式のとき神楽が行なわれたという事例はわずかであるが報告されたものを整理してみる。宮崎県東臼杵郡椎葉村の梶尾神楽では、祝子が死去した場合、葬式の時にお棺の前

で「老神楽」の下の条（後段の幣の手）を舞う習わしがある。これを「舞出し」といつている。老神楽のご幣は、本来色幣であるが、舞出しの時は白幣を持ち、また鈴も神楽鈴を輪鈴に変えるという。宮崎県高原町の祓川では、屋主が死去した場合、通夜に遺体の前で、神楽の「神随」という演目を舞う習わしがある。祓川ではお棺におさめてから舞うこともあるという。岩手県水沢市では葬式の後に、神楽の「宮しずめ」か、剣舞を躍らせて供養することもある。（注19）葬儀の際行なわれる神楽の報告はそれ程多くないが、渡辺がいうように椎葉村梅尾の「老神楽」には唱える唱教があり、そのなかには法華経、釈迦、西方浄土などの言葉が出てくることから「舞出し」は出棺の前にして死者を浄土へ導くための舞とも考えられるという。即ち、死者を再生させることではなく、浄土へ導く、成仏させるために行なわれたと思われる。梅尾の葬儀に行なわれる「老神楽」を「遊び」の一種として考える場合、再生ではなく、死者を清める、即ち、死者に取り付いていると思われる不浄なもの、あるいは、災いをもたらすモノ達を追い払うために舞われたと思われる。清められた死者こそ、別のものとして生まれ変わるといふ思想があるとは考えられるが、甦らせるという再生の意味ではないことは確かである。祓川の場合もお棺に納めてから舞うこと、水沢の葬式の後に「宮しずめ」、「剣舞」が行なわれたことは梅尾の「老神楽」と同様に復活、再生の招魂ではなく、鎮める目的であることがわかる。宮崎県の日向神楽が行なわれる地域や佐渡の加茂村などに神楽を葬式に行なわれたことが西角井正慶の『村の遊び』に記されているが詳しいことはわからない。（注20）それによると、「宮崎県の諸方郡の山間では村葬といった公の場合に霊前で舞い、これがないと御霊は案じて昇天出来ない信じ、戦死の英霊を祭る時でも行なったが、神前の舞と違えてすべて逆に舞う。佐渡の加茂村の葬式神楽は、まず岩戸神楽があつて、奉幣し祝詞を奏上して、後は一般葬祭式の通りでおこなった」という。一般葬式の前に岩戸神楽が行なわれたことは、死者の霊を呼び戻し、再生させるために行なわれるとも考えられる。また、記紀の岩戸神話の葬儀説を裏付けるものとして注目する必要があるが、詳しい内容が記されていないのが残念である。隠岐の葬式神楽については牛尾三千夫『美しい村』に記されている。墓所へ大きな青竹を立て、それに長い白木綿を垂げて、その下で楽の音に合わせて廻る。機をみてその木綿を引くと青竹はすばんと折れたこと、また柳田国男が東郷村の老神職から聞いた話として、青竹の大きなを立て、其の下を血族が神楽の囃子につれて廻るのであるが、其の時鉦用のものでその青竹を打切ると、竹は素直に切れたまま地上に立っている。其の時仰

ぎ見ると竹の梢は一面火となり誰一人これを正視する者はないそうである。この時始めて死者との血縁が切れるのであると云われる(注21)という。葬式を行なう目的の一つに死者と血縁を切ることがある。韓国の死霊祭の時、死者が生前に使った米甕を大きい音がなるように砕く場合がある。すなわち、この世に未練を持たずに、あの世へ旅立を促す為の行為であろう。日本の葬儀には出棺は玄関口で出すのではなく、縁側に出すという風習も、戻ってこれないようという意味が込められていると思われる。すなわち、葬式の際に行なわれる神樂をはじめとした一連の行為は、死者と生者との別れをはっきりさせるための葬儀の目的と一貫している。

今日において葬式の時、芸能が披露されたという民俗資料はわずかに過ぎないが、上述した記紀などで見られる葬儀の際行なわれたという管弦(芸能)と関連して考える場合、嘗ては葬儀に神樂をはじめ芸能が行なわれても不思議ではないと思われる。葬祭の際の神樂は、出棺の際、または葬儀後に行なわれることから、死直後の「魂呼び」の目的とは異なることは確かであろう。

## (2) 霊祭神樂

神樂は一般の祭りと同様に毎年同じ時期に行なわれる恒例のものと、それとは別に三年、五年、七年、一三年毎などの式年に行なわれる式年の神樂があり、また、不定期的に行なわれる臨時の神樂がある。そのなかで、特に式年に行なわれる神樂は大掛かりで行なわれる。その式年というのは神社や祭りことによつて異なり、式年を定める基準もさまざまである。例えば同じ大元神樂が伝承される地域でも、集落ごとに四年、五年、七年目など多様である。備中神樂も荒神神樂の場合、七年または一三年目に行なわれる。十二支による一三年毎とその中間の七年という説もある。

平成一五年三月茨城県の東西の金砂神社磯大祭礼が七二年振りに行なわれ、大変な賑やかさを見せたが、小祭礼は六年毎に行なわれる。五年、七年、一三年というのはどのような基準に基づいて定められたのだろうか。一つの手がかりになるのが式年祭である。『神道大辞典』から「式年祭」の項目を引いてみると、

山祭り 一定の年を期し、定例の儀式として執行する祭儀、『皇室祭祀令』によれば、崩御の日より、三年、五年、十年、二十年、三十年、四十年、五十年、百年、及び以後毎百年とすと定められてゐる。その期に地は崩御の日に相当する日であった、(中略) また神社に於いても、式年祭を行なう風が存してゐる。近世の令であるが、鹿島神宮に於いて、毎十三年の九月一日(三日)に御船祭、御幸祭を行なう如き、それに属する。(注22)

とある。式年祭は天皇の弔いと深い関係があることがわかる。それと因んで、「年忌」の項目をひいてみる。

死後一定の年数を期して行なわれる死者の供養の儀礼で原則として死没した月日に行なわれる。回忌ともいう。天皇の回忌は国忌みと呼ばれた。この日に死者供養の仏事が行なわれる。一周忌(ムカワリ)、三回忌、七回忌、十三回忌、十七回忌、二十五回忌、二十七回忌、三十三回忌、五十回忌、百回忌とある。通常は三十三回忌で終わるが、浄土真宗の地域では五十回忌、百回忌も行なっている。(注23)

年忌毎には僧侶を呼びまたは寺にいつて供養し近親を招き饗応するのが一般の習わしとなっている。仏教と神道の習合の一面をみることができる。

神楽の式年ということも、祭りの主な神(死霊から神靈化された)の年忌と関わっているのである。(注24) 日向地域の高千穂神楽は天孫降臨の地として知られている所の三三番の夜神楽であるが、その神楽は他地域の神楽と同様に様々な仮面が使われている。民家の屋敷で神楽場である「みこうや」を設け、神社に納めている仮面(神)を迎えてくる。神楽の神の面のほかに死者の仮面、即ち、死んだ人の面相を刻んだものもある(注25)という。詳しいことはわからないが、死者の仮面があったことは神楽の一部として死者を弔う場面があったのではなからうか。死者の仮面を被った舞が行なわれたことがあったかも知れない。遠

山祭りの由来談に、村人の一揆によって殺された遠山一族を弔うためであるという説がある。実際祭りの中には八社の面といい、遠山一族八人の人々を象った面を被り、湯立の釜の周りを巡る舞が行なわれる。

そのほか、霊祭神楽と見られる報告をまとめてしるす(注26)

・ 保呂羽山の周辺地域では明治初年の頃までは菩提神楽・後生神楽・霊祭神楽などと呼ばれた故人の菩提を弔う神楽が年回忌や祖先祭に行なわれていた。

・ 仙北郡西木村西明寺の大蔵院に残る慶応二年(一八六六)の「菩提湯立神楽次第」によると、亡者招ののち、閻魔王と先達と浄土問答があり、神子四人立ての剣舞による千倉託宣卸が行なわれる。亡者招では、胴取の法印の神歌のはやしによって神子が四方に舞いながら神がかかる。四方にそれぞれに亡者を招くごとに胴取による舞歌がある。

・ 陸中下閉伊郡、九戸郡、陸奥三戸郡、八戸市一帯では山伏神楽の権現舞に権現祈禱の墓獅子(墓念仏、神楽念仏とも)というのがある。一〇〇日忌・一年忌・三年忌・新盆などの死者の供養に山伏神楽の組が仏壇の位牌の前や墓の前で楽と神楽歌によって権現の獅子をまわす。

・ 花祭として知られている愛知県三河地方の南設楽の大野・東郷・長篠などの地狂言は、主として、戦死者の塚のある場所や崇り神・亡魂の鎮まり処と伝える村境あたりに舞台を組んで、回向狂言・盆狂言などと称して芝居を行なう。

・ いざなぎ流神道として知られている高知県物部村では太夫職が死去した場合、仏式で葬られたあと、二・三年経ってから、その死霊を鎮魂浄化する荒みこ神取り上げ神楽が行なわれる。その三・四年後には、荒みこ神をみこ神(祖霊)の座につける迎え神楽が行なわれる。墓地から死霊を墓オコシして、幣につかせて神楽の舞台に迎え、荒みこ神に舞上げる。

・ 豊前の中津市植野の植野神楽が行なわれているところでは、湯立神楽(行者が湯立の火渡りをする熊野修験系のもの)・神坂神楽とともに、鎮魂の年回神楽が保持されている。年回神楽は社家秋満家の祖霊および神楽社員の年忌に舞われている。鬼杖の鬼神と幣差とが墓を廻りながら霊前御先を舞いあげたのち、墓地から神楽場所まで御霊を迎える御霊迎を鬼神に幣持・太刀

持・薙刀持が続いて楽で道行しながら舞う。いわば、死霊の練り込みである。御霊が神楽場所の柵に鎮座してから本神楽が次々に舞われるが、湯立はない。

以上、死霊を弔うための霊祭神楽は三年、五年、一三年など年忌に行なわれるのである。神楽の式年との一致は偶然であろうか。また、霊祭神楽の中では、仙北郡西木村の事例に見られるように死者の神がかりと託宣など、今日の神楽とは違う様子がうかがわれる。

霊祭神楽の報告のなかでも、もっとも詳しく記されているのは隠岐の霊祭神楽である。明治初年ころまでは行なわれたという死霊鎮魂の八重注連神楽は松浦康磨によって報告されている。それによると、「浦之郷村諸社常例神事定日記并家格勤来り之社家記録」（西の島町赤之江の社家秋月家所蔵）に社家病死の際には、①寺社会勤で神楽葬式、②社家社中会勤で七日目に橋経、③病死の年から二年目か三年目に霊祭神楽を行なうが、神楽棧敷は郷中の人夫によって墓所に拵える。宮守（よこや）病死の際には①と②を行なう例であった（注27）という。また隠岐の霊祭神楽の際には「身ウリ能」をふくめて、「ハシ教」「八重垣」が行なわれたのである。それについては西角井正慶、倉林正次、岩田勝（注28）に論考に詳しいので、ここでは先学の指導を蒙りつつ、「身ウリ能」と謡曲「身売」とそれから、韓国の巫儀に見られる身売りについてのべることにする。

### 3. 身売り能

隠岐の葬祭神楽の際「身ウリ能」という曲目が行なわれたことは前述したが、身売りは「かぶき」などでも貧に迫られて金を得るために娘や若い女房役が遊女に身を売り場面があるが、いかにも乏しい状況を表す場面である。能の曲にも、「隅田川」「百万」「自然居士」などに身売りが重要なモチーフになっている。身売りという習俗は昭和初期ころまで行なわれたことが報告されている。（注29）人間の悲哀でも、最も切実さを感じさせることであろう。



謡曲の中に「身売」という曲目がある。その曲目と隠岐の葬祭神樂で行なわれた「身ウリ能」とを比較してみると、葬祭神樂で行なわれた「身ウリ能」の特性が明らかになるだろう。謡曲の「身売」は別名「神原」ともいうが、現在廃曲になっている。謡曲「身売」は長篇で写本は多い。①謡曲叢書本、②元禄版本系③福王系④上杉本の四系統がある。「身売」は室町中期、一五世紀末か一六世紀初頭頃の作とされ、最古の演能記録は天文元年（一五三二）五月二日、一条西洞院での日吉猿樂勸進能第四日のものであるといわれている。（注30）

能の「身売」は隠岐の靈祭神樂のおり行なわれる「身ウリ能」とは大異なる。まず、謡曲の「身売」筋を述べると次ぎのとおりである。

シテは兄太郎、ツレは次郎、ワキは奥州の人商人で場所は越後蒲原である。兄太郎は家が貧しくて父母の供養もできないことを悲しみ弟と相談する。太郎は次郎に借金を打ち上げるが実際は身売りを決心するのである。太郎は人商人に身売りに行き、次郎は父母の供養を頼みに寺の導師に行かせる。兄は三〇歳余りで芸能弓矢細工、馬の爪髪ができることで身売りの契約をする。両親の供養の為三日の暇を乞う。商人は追い風が吹くとすぐ、船を出すのでその場合はすぐに船に戻らないといけないという条件つきで三日間の暇を与える。

次郎は寺の導師を連れてきて早速供養が始まる。追い風が吹くので、商人が来て兄を連れて行くこととする。兄は供養の最中なので、しばらくの暇を請う。導師による供養が終わり、兄を連れて行くこととする。次郎は太郎が身売りをしたことを知り、兄は妻子がいるが、弟は一人身なので、兄の身代わりになろうとする。兄弟がお互いに自分の身を連れてつてくれと争う。商人はその様子を見て哀れみ、心に打たれて、身の代を許す。兄弟は商人に感謝する。商人は船を出し出発し、遥の沖に走って行く。兄弟は手を合わせて、商人の慈悲に感謝し、仏の国に行く舟を岸辺で立って見送る。

廃曲された「身売」では男兄弟の大人の話になっている。主なモチーフは両親の供養のために身を売ることと兄弟愛を表に出している。さらに、仏の靈力ではなく、商人の人情深さに焦点が集められている。作者は仏の国にいく船のように設定など、仏教色

が残ってはいるものの、焦点は兄弟愛、それからそれに感動した商人の人間的な慈悲が中心になっている。それとは別に隠岐の葬祭神楽の時行なわれた「身ウリ能」は説経節「まつら長者」を能楽化したものである。まず、隠岐の「身ウリ能」の内容をみると、

奥州（注31）のカネタカという商人が二、三歳の身を売る人を探しに国々を尋ねる。商人は大和の国宇陀（ウダ）の郡壺坂宿に宿をとり、未だ男に接したことがない二、三歳の女の子を売る人を探すと、う札を立てているところに一人の女性が訪ねてくる。女人（ヒメ）は身を売る理由を商人に打ち明ける。女人の親は本来四方に四方の蔵に黄金（コガネ）の長者であったが、三十九歳まで子供がなくて、長谷観音に百日詣でをして漸く子供ができた。しかし、万宝の長者も貧苦になり、母は病気になる、父は亡くなった。ある時、御堂の尊い上人の話によると、自分の身を売り、親の菩提を弔うべきであると聞く。母親の身命を助け、死んだ父親の菩提を弔うために自ら身を売るといふ。

商人は千両で女人を買うことにする。女人は二日間の暇を貰って、僧侶に頼み一三年忌の供養を行なう。商人は哀れみを感じながら、焼金印をもつてくるといふ退場。女人（ヒメ）は母親のところに戻り、母親には東の蔵の跡に金千両を見つけたと偽りをいふ。五百両は今日か明日に持つてくることにし、残り五百両は明日、父親の一三年忌になるので、僧侶に頼み、自分は出家するといふ。しかし、娘をつれに着た商人により母親もその事情がわかり、怒り悲しむのである。母は腹立ちて歌にあわせて舞を舞う。商人ははじめ女人を買う理由を打ち上げる。奥州には大きな池があり、その池には五色の大蛇がある。その大蛇は人を食い殺す恐ろしい存在であるが、それを防ぐ方策として一年に一度棚祭りをして寅年には一人を捧げることになっている。商人の一人の子が大蛇の生贄になる当番になったので、自分の子代わりに人の身を千両で買い、明日には棚に上げ大蛇の生贄（カンジ）にあたえることにしたのである。ヒメ君は父親の菩提のため自ら身を売り、いかなる大蛇の餌食になることも、火の中、水の中に身を投げることも、前世の決まりであるから、命を惜しむことはないといふ、商人に連れられていく。

いよいよ、ヒメを棚の上に置き、毒蛇が現れてヒメを飲もうとするとき、ヒメ君が大蛇に暇を乞う。父親から譲ってもらった法華経一つあるが、これを唱えることにしてくれといふ。毒蛇は法華経という詞をきいて、ありがたいと思ひヒメ君の暇乞いを叶わ

せてあげる。

ヒメ君は袂から法華経を取り出し、一卷、二巻は諸神諸仏に奉り、三巻、四巻は父母のため、五巻は自らの身のため、六巻は商人のため、七巻は今日弔門に来た人のため、八巻は大蛇のために捧げるといふ。

ヒメ君の詞を聞いて大蛇は、この池に住んで九九九年、人をとる事九九九年。人を腹するのが千人に達するところに、尊い仏に参り会い、お経の功力をもつて一六の角が落ち、蛇体から逃れ、お経の申し布施に千両を奉り、母を壺坂の観音と祝い申すべし、御身は後に、竹生島弁才天と祝い申す。我は後ろに蛇王権現と祝う。商人はカンヌ王と祝う。まず、今の御身は高い身になって、元の壺坂へ帰る。(注32)

という内容である。糜曲「身売」と「身ウリ能」はともに身売りが主なモチーフになっているが、「身売」では三〇歳の大人の男性に比べて、「身ウリ能」では、一・二・三歳の娘である。商人が人を買う目的も「身売」では大人の労働力や芸能(芸能弓矢細工、馬の爪髪)が出来ることで、人身売買の契約をするが、「身ウリ能」では、大蛇の生贄になる自分の娘の身代わりに「女人」を買うことになっている。両者ともに父の供養のために身売りをするが、「身ウリ能」では、商人が娘を買おうとする目的が明らかであり、自分の娘を救うためという切実な理由があるが、「身売」では商人が人買ひするのは、兄太郎、即ち、身売りする側の要求があつたからで、商人の切実さはないのである。また、両方ともに仏教的な思想が潜んでいるが、「身ウリ能」の方がもっと具体的に「法華経」の霊力によって、危機から免れることになっている。内容のストーリーからは「身ウリ能」がもっと説話的ではあるが、「身売」よりはもっと劇的である。

霊祭(葬祭) 神楽のなかには「身ウリ能」の他に地獄に落ちた母親を救う内容の「目連能」や、大蛇退治の「八重垣」などの曲目があることから、糜曲「身売」とは趣が異なる。「身ウリ能」が父親を弔うためという内容なので霊祭神楽には最も相応しい能であつただらう。死霊を弔う目的で行なわれる霊祭神楽に「身ウリ能」が行なわれる理由としては父親を弔うことに因んだものであることは言うまでもないが、身売りというのは人間としての存在を放棄することであり、もっとも過酷な苦難の象徴でもある。

韓国の巫俗儀礼の中に身売りの物語が巫女（巫堂）により長らく語られる次第（演目）がある。沈清グツ（巫儀）がそれである。しかし、過去には死霊祭にも「沈清グツ」が行なわれたかどうか確認できないが、現在は死霊祭にはない。

巫儀の死霊祭には身売りの語り物はないが、過酷な苦難の末、死んだ両親を再生させる語り物が伝えられている。捨て姫（バリデキ、バリ公主）である。捨て姫については後の東海岸地域の死霊祭（オググツ）に触れることにして、ここでは沈清グツについて述べることにする。

沈清グツは東海岸地域の村祭である別神グツ（ビョルシンググツ）のとき行なわれる。ストーリーは韓国の代表的な古典芸能であるパンソリのなかの一演目であり、沈清伝という小説も伝わっている。

黄海道 黄州郡桃花洞に目の不自由な人がいた。姓は沈、名を「鶴圭（ハッキョ）」という。人々は彼を「沈奉事（シンボンサ）」と呼んでいた。目の不自由な人を「奉事」というからである。

沈奉事の妻である郭氏は賢い女性であったが、娘を産んですぐに、亡くなってしまった。その娘の名前は沈清（シンチョン）である。父は目が見えないが娘を抱いて家々を訪ね母乳乞いをして育てる。沈清は、他人の乳を飲ませてもらいながら育てられたのである。

沈清は、一五歳になったときから娘が盲目の父親のために物乞いや、父の世話をした。余暇があると裁縫や勉強も怠ることがなかった。近所では大変親孝行の娘だと評判になるほどであった。その名前が隣村である武陵洞にすんでいる張丞相夫人に大変かわいがられた。さらに、沈清を養女にしようとしたが、目が見えない父の側を離れることができないからと拒絶したのである。ある日、夢運寺の住職僧が来て、米三〇〇石を供養すると、目が見えるようになると言い出した。それを聞いた父は前後を考えずに目がみえるようになるという話に三〇〇石の米を捧げることを約束してしまった。

その頃、都から数一〇名の商人がきて、処女を求めてきたのである。商人たちは唐と貿易する人たちで、臨堂水（印塘水）という海路は危険なので、処女を生贄にすると、海路安全を確保するため人買いするという。その話を聞いた沈清は供養米三百石に身売りするのである。約束された日に臨堂水に身を投げる。上帝が四海竜王に命じて、親孝行する沈清を玉蓮花に包み、臨堂水の上

に返還させたのである。商人たちが大變利益を得て唐から帰国するたびに水の上に浮かんでいる蓮花をもって、天子に捧げる。その蓮花から処女沈清が現れ、天子の王后にする。王后になった沈清は盲目の父を探すために盲人宴を開く。ようやく盲人宴に辿り尽き、末席に坐っている父を発見した沈清は「お父さん！」と呼ぶ瞬間、父は驚き目が開けたのである。

主なモチーフは娘の自らの身売りと父の目明けである。沈清グツが行なわれるところは漁村の漁夫には目が大事であるから、また、グツの見物人の多くは老人なので、沈清グツを行なうことによつて目がよくなると巫堂（みこ）たちは言うが、それはあくまでも理屈に過ぎないと思われる。むしろ、仏教色のこい説話によつて仏教の功德を得ようとする目的があつたのではなからうか。巫儀に身売りの話が語られる理由は明らかではない。謡曲「身売」、靈祭神樂の「身ウリ能」、それから韓国巫儀の「沈清グツ」は死者か盲目かの差はあるにしても、三者ともに父親のための身売りになつている。父権社会から生じた産物だろうか。また、三者共通点としては、主人公が身売りという究極の苦勞を自ら選択するが、最後には仏力によつて幸せになることである。特に、「身ウリ能」と「沈清グツ」は「身売」には見られない共通性を見出すことが出来る。両者とも主人公が若い女性であるという表面的なこと以外にも、「身ウリ能」と「沈清グツ」は人身供養というモチーフである。前者には池の大蛇に、後者は臨堂水という海の生贄になるのである。

両者とも水と関連している。臨堂水には大蛇のような具体的な怪物は設定されていない。しかし、商人が臨堂水に生贄として娘を捧げる理由が海路の安全のためというところから、臨堂水には海路の安全を妨害する、大蛇ではないにしても抽象的な何かを設定されていても不思議ではない。それは女主人公は海の神とされる龍王に救われることから十分考えられる。

それ以上深入りしないが、「身ウリ能」と「沈清グツ」は共に祭儀の一部として、共通的なモチーフを持った同系の説話といつていいだろう。

「沈清グツ」と同一な内容の古典小説「沈清伝」、パンソリ（語り物）の「沈清歌」が存在するが、未だにその前後影響関係は明らかにされていない。

「身ウリ能」が説経節の「まつら長者」から靈祭神樂の能へ取り入れられたという事実は、小説「沈清伝」、パンソリ「沈清歌」と巫儀の「沈清グツ」の影響関係の究明に他山之石になるに違いないと思う。また、説経節の担い手や、巫儀の担い手である巫女と法者などを究明することによって、新たな側面が浮かびあがってくると思う。それについては今後の課題にしたい。

#### 4. 韓国の葬送儀礼と芸能

韓国においても葬送儀礼に歌舞が行なわれたことは早くから記録に見える。『隨書』卷八一「高(句)麗」条に葬儀の風習が記されている。

「死者於室内、經三年扱吉日而葬、居父母及夫之喪、皆三年、兄弟三月、初終哭泣、葬則鼓舞作樂以送之、埋訖、悉取死者生時服、既車馬、置於墓側、会葬者爭取而去。」

死者がでると室内に殯を設置して三年後に吉日を扱ひ、葬儀を行なったのである。父母や夫の喪は三年、兄弟の喪は三ヶ月で、最終哭泣する。葬儀のときは鼓舞作樂をもつて送る。埋葬が終わると、死者の生前の服を墓の側に置くと会葬者が取って去るのである。百濟の喪制は高句麗と大同小異であった(「喪制如高麗」)。新羅の場合は喪の期間が一年であったのである。(「死有棺斂、葬起墳陵。王及父母妻子喪、持服一年」)また、新羅が三国統一に貢献した金庾信の葬儀のときには、大王が軍樂鼓吹隊百名を送って奏樂させ、金山原に葬ったという。(注33)王が臣下の死に軍樂鼓吹隊百名を送り奏樂させたという記録は高句麗の古墳に描かれている舞踊図や大行・図などを連想させる。高句麗の広開土大帝(三七五四一三)の塚とされている中国吉林省鴨綠江中流域にある輯安県通溝の舞踊塚は、壁面と天井には壁画が描かれている。東側の壁面には舞踊図が描かれているから舞踊塚と称されるようになっていく。舞踊図には中央に五名の男女踊り手と前方には指揮者または、指導者のような人が、それから下部分には七名の囃子方または地謡のよ



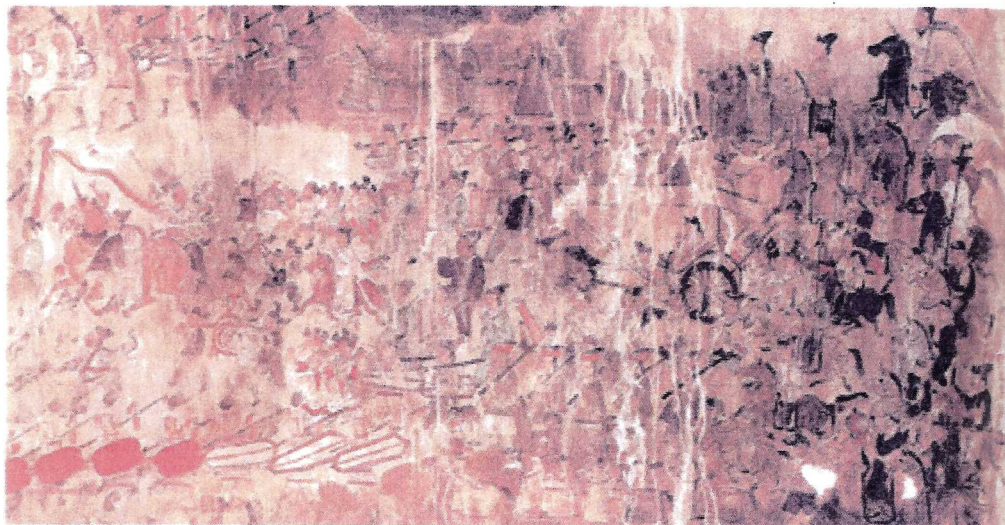


舞踊塚（吉林省集安県）四世紀末～五世紀初：玄室右側壁壁画  
 『朝鮮遺跡遺物図鑑』より



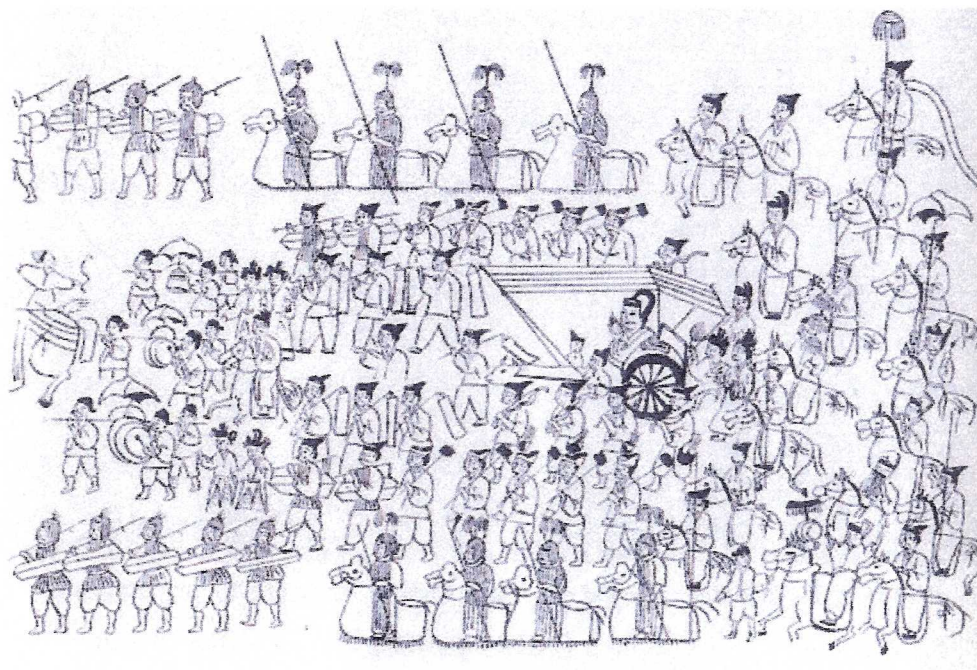
舞踊塚（吉林省集安県）四世紀末～五世紀初：玄室右側壁壁画（配置図部分）  
 『朝鮮遺跡遺物図鑑』より





安岳第三号墳（黄海南道安岳郡五局里）：前室東壁壁画 行列（模写図）

（『朝鮮遺跡遺物図鑑』より）



安岳第三号墳：前室東壁壁画 行列（模写線画）

（『朝鮮遺跡遺物図鑑』より）

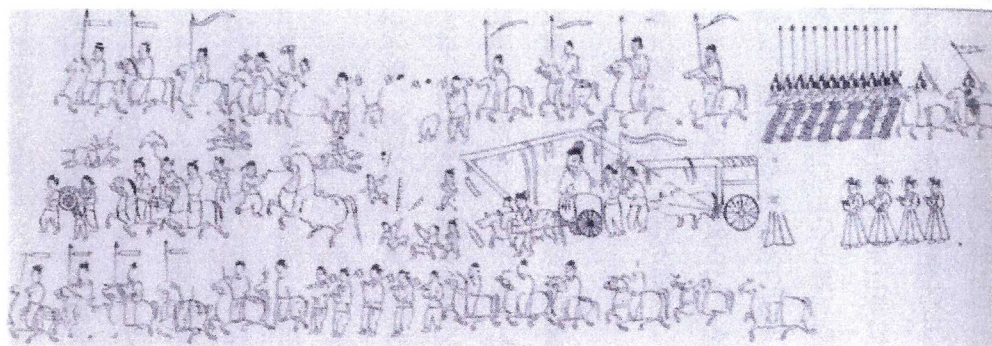


水山里壁画古墳（南浦市江西区域水山里）五世紀後半：玄室西壁上段の壁画（模写線画）  
 （『朝鮮遺跡遺物図鑑』より）



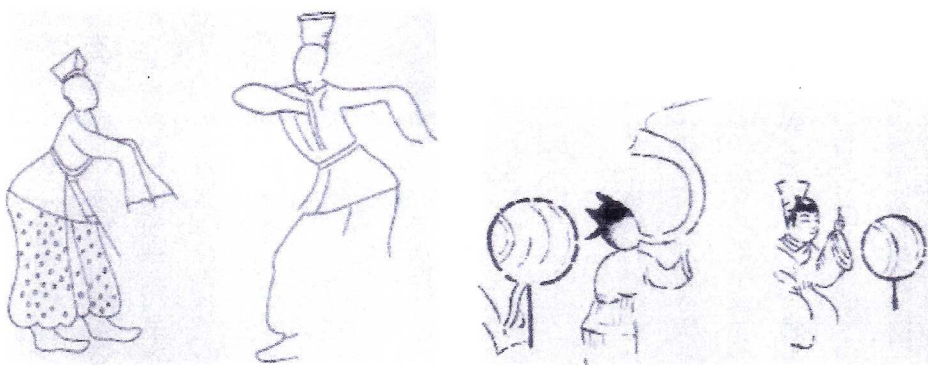
八清里壁画古墳（平安南道大同郡八清里）四世紀末～五世紀初：前室東壁の行列（模写図）  
 （『朝鮮遺跡遺物図鑑』より）





薬水里壁画古墳（南浦市江西区域薬水里）前室東壁と南壁の行列（模写線画）

（『朝鮮遺跡遺物図鑑』より）



麻線沟第一古墳（中国吉林省集安县）四世紀後半：玄室 舞踊（模写線画）（左）

平壤駅前壁画古墳（平壤市巾区域蓮花洞）四世紀初：前室南壁 鼓吹楽手（模写線画）（右）

（『朝鮮遺跡遺物図鑑』より）

うな人が見える。踊り手は長い袖に白生地、黒または黄色の水玉模様の服を着ている。

また、中国（前燕）高句麗に帰化した冬寿の塚とされる安岳二号墳（冬寿墓）の南壁には舞樂儀仗図、玄室の東西壁には舞樂図が、廊下壁には行列する車駕の前後に樂隊が従う絵などが見える。八清里の壁画古墳には高足や玉刀などの散樂風の曲芸を演じる姿が描かれている。李杜鉉は以上の古墳に描かれている歌舞や雑技、奏樂行列などを葬送（野辺送り）の様子（注34）であると指摘している。しかし、舞踊図や奏樂隊の行列のほかに、牛小屋、井戸、台所など日常生活の様子が描かれている部分もあるので、奏樂行列図を直ちに葬送儀礼の図と見るには多少躊躇される。上述した金庾信の葬儀に百名の軍樂鼓吹隊が奏樂したということから

考えれば、高句麗においても葬送儀礼に古墳壁画に描かれたような歌舞や雑技をともしなう奏樂行列があつても不思議ではないと思われる。

葬儀に歌舞や雑技が伴う風習は朝鮮時代に入つても続けられたのである。

『朝鮮王朝実録』卷三八 成宗五年（一四七四）辛丑（正月一五日）に「礼曹啓、令承伝教輪对者有言、慶尙全羅忠清道、俗尙浮誇、葬送之事、務為華侈、祭奠油蜜之費、幾至数斛、多辨酒饌、広招郷隣、大張声楽、終夜而罷、名為娛尸、以此破産者多、貧者難辨、累年不葬、傷敗風俗、莫此為甚、其痛禁之。」とある。

葬送儀礼が奢侈過ぎて、過酷な費用がかかるにも拘わらず、酒饌で広く郷隣を呼び、夜を通して歌い声が絶えないほど行なわれたのである。それを娛尸という。そのために破産する人も多く、費用を賄うことが出来ない貧者は、何年が経つても葬儀が出来ないという。そのように風俗を害するものが硬く禁じるべきであるとの指摘である。同じく成宗二〇年五月条にも同じ記録が見える。「全羅道と慶尙道の風俗には民間で父母が死ぬと、葬礼が始まる前日に帳幕をはり、その中に棺を置き、供物を供え、簡単な祭祀を行なうばかりではなく、僧と隣人を集めて、雑戯飲酒歌舞で徹夜する。知識人もその風俗通り行なうが、その費用は龐大で、貧乏な人は準備する力がなくて忌日に過ぎて葬儀を行なうことが出来ないの、これは実に教化を害するものなので厳しく禁じるべきである。」（注35）

度をこえてぜいたくな葬儀を禁ずる法律（令）が何回も出されても、その効果があがらなかったことは、それほどに、葬儀においての雑戯飲酒歌舞が一般化されていたかを物語っている。

そのような風習は今日においても形は変わったものの、その基底にながれている思想は残りつつある。では、実際死霊祭のとき行なわれるさまざまな芸能の様子をみることにする。

#### (1) 死霊結婚（オググツ）

韓国東海（日本海）に沿って巫覡の集団がある。彼らによって行なわれる死霊儀礼をオググツと言う。オググツが彼らの専有物ではないことはいままでもない。ジンオク、マルンオグという言葉があるように、ジンオグは葬儀の当日、四九日目或いは一年以内に行なわれること、マルンオグは一年以後、三年目、一〇年目等葬儀からの死霊儀礼をいう。すなわち、死身の状態から称された名称である。ジンオグは死後間もないころ、死体がまだ湿った状態のときに行なわれる死霊祭であり、マルンオグは死後時間がたつて死体がすでに骨になって乾いた状態になったときの死霊祭である。ここでは一九九六年三月一〇日に慶尙北道 蔚珍郡 箕城面 邱山里平山申氏の家で行なわれたのを報告の形で紹介する

オググツを主催する家の家族は母と息子二人娘三人の家族である。長男は結婚して母親と一緒に住んでいるが、娘三人は結婚して別居している。末子は一九九一年当時結婚していない未婚で死亡した。父親は当年（一九九六年正月一日）に交通事故で死亡した。父親が交通事故で死亡した理由は五年前に死亡した息子（末子）の魂に招かれて死に至ったと思われたのである。母親は死霊祭を望んだが、長男と娘、そして、娘の躰、皆最初はグツ（巫儀）を行なうことに対して反対していた。結局は母親に親孝行する気持ちで母親の希望通り行なうようになったという。ここで、長男と躰の反対も理由がないことはない。グツをやるのは大金がかかるし、合理的な学校教育を受けた人は、大概、巫堂のグツ自体に反対しているし、むしろ迷信という考えを持っている。しかし、父親が亡くなったのも五年前に死んだ息子が連れていったと思ひ、もしかすると、また、家族の誰かに大変なこと（死亡事件）が起ころうとも知らないという理由で、やむを得ずオググツをやることになったのである。



今度のオググツは二カ月前に死んだ父親(申〇〇(五九才)と五年前に死んだ息子(二七)の二人の死者に対する死霊儀礼である。死者申〇〇(五九才)は一九九六年正月一日、村の入り口のところ、運転していた耕運機が堤防から転倒して死亡したのである。その息子は一九九一年当時二七歳で、軍人であった。空軍中士(階級)で、体が大きく逞しい青年であったそうである。軍隊から休暇を得てキャンプ(登山)に行つて、岩壁から落ちて死亡したのである。参加巫堂は金美香、宋東叔(以上二人夫婦)、宋明姫、金長吉(以上二人夫婦)、朴琴天、宋正煥(以上二人夫婦)、史花仙(朴琴天の母)五人である。

グツは午後五時から始まる。勿論その前にグツ堂を設けたり、供え物を用意したりする。グツ堂は仮設のテントで、広さは大体四方五メートル程度である。当日朝一〇時ごろに現場に着いたが息子と賀が仮設グツ堂を設置していた。巫覡の指示によつて、供え物を捧げる。娘と嫁さんたちはグツ堂にくる人々(ほとんどは村のお婆さん達である)にもてなすご馳走も作るのである。オググツの次第を順序によつて記す。

前日には死者(息子)の事故現場に行き、魂迎え(ヌツチョンバジ)をし、海岸のグツ堂に連れてくる。死霊は死亡した現場の辺りに漂っている観念が見られる。

① 当日午後五時に自宅でデネリム(仏降ろし)をする。

② 不浄グツ：巫覡達が楽器を鳴らす。場所を清めることである。

③ ゴルメギソナングツ：巫女が囃子とともにゴルメギハルベ(翁：村の守護神)に今日オググツを行なうことを告げる次第である。グツ堂の外側に立って置いたソナンテエ(竹竿に白紙を付けたもの)を持って、グツ堂の入口で、振りながら神が着いたことを表す。もう一つのソナンテエはグツ堂のなかに持ち入って祭壇や遺族の頭の上を振るのである。その間に巫堂は死者の恨みを口に出す。それが終わると、祭壇の前に置いてある神酒を遺族に与える。其の神酒を飲む順序も決まっている。母、長男、賀、親戚の順序である。この神酒は命盃、福盃と言つて飲み代を貰うのである。二つの竹竿が用意しているが一つは村の守護神のことで、もう一つは死者のものとされる。

④ 門グツ：竹竿、位牌、写真、シンテジブ(神胎家の意味で、プラスチック製の四角の籠に赤紙と白神を重ねて覆つて家の屋根

のように作ったもの、莫塵、蓮花を持つ遺族と囃し方(ケンガリ(小鉦)、ジャンコ、ジン(大鉦)：囃し方は巫女の夫)の順に列を作って本家に行く。遺族たちは白木綿で、繋がるように持つて行く、グツ堂と本家の間の距離は150メートルくらいで、家の前に着くと僧の姿で、ケンガリを持つ男巫(金張吉)が家の入り口で家に向かって念仏を唱える。部屋のなかに入ると遺族は持つてきたものを、部屋のなかに祭壇を設けて礼拝をする。そのあと前の男巫が座って楽器(小鉦)を叩きながら念仏を唱える。それが終わってから夕食をとる。夕食後、グツ堂から来る時と同じ順序でグツ堂に向かっていく。家から出発しようとするとき、莫塵を手にした母が突然神がかり状態になった。死んだ父(夫)の霊が憑いたようである。泣きながら、「俺は行かない、行けない、行かない、家があるのに何処に行くの、俺は行かない」と行かないを繰り返しながら絶叫するのである。生前の父の部屋を見回しながら家から離れるのを拒む。巫堂と親戚たちによって、押さえられ静められる。部屋の外に出ても、何回も部屋の方を振り向いて、未練を捨てないのである。ようやくおさまって、男巫が庭先で部屋に向かって経文を唱えたあとで、グツ堂に向かう。その時、いままで平素使った米の甕も一緒にグツ堂に持つて行ってグツ堂の入り口の外側に置く。グツの全過程が終わったあとに、大きい音が出るように砕いて割るのである。すなわち、米甕を割ることによって、もう家には死者が食べる米飯がないから、家に未練を持たないようにするためと言われている。

⑤ 嘘結婚：グツ堂に帰ってくると死者(息子)の霊魂結婚式が行なわれる。結婚式は儒教風で、新郎新婦は人形であるが、他は普通の結婚式と同じ式順で行なわれる。参考に簡単に紹介すると新郎登場、北側に向かって二礼、新婦の登場、新郎新婦手を洗う、両方向かい合い礼、新婦二礼、新郎一礼、酒交換、膳床に横渡るように掛けられている五色の糸の上方に新郎の盃を下方に新婦の盃を交わす、新郎新婦の人形は遺族が人形を操る、酒と肴はその人形遣いが食べる、新婦二礼、新郎一礼、酒交換、肴(棗)の交換、新婦四礼、新郎二礼、酒交換、記念写真撮影の順序で結婚式が行なわれる。人形は新郎新婦の姿の人形を新郎は親戚の男性が、新婦は親戚の女性が持つ。巫覡が結婚式の司会役を務める。死霊祭で悲しい雰囲気であるが、司会役は冗談を混ぜながら、客席から笑いを誘う。結婚式が終わるとお祝いの宴(歌舞)が行なわれる。龍船に細長い木綿を結んだものを揺らしながらムードンたちが出て、喜びの舞を舞う。客席からは扶助金や、写真代を貰う。それから新郎新婦の人形は祭壇

の下に寝具を用意して新婚初夜を過せるようにする。

⑥ 祖先グツ：死者の家の祖先神を呼び出して接遇する次第である。祖先グツの時は新たに用意していた祖先の服を一つ一つ持って祖先を慰め、子孫に福を与えてくれるように祈願する。

⑦ チョマンザグツ（招亡者グツ）：死者と遺族との最後の別れる場面である。真正の神がかりというよりは巫女が死者の役割を演じるように見える。巫女は死者の魂が座しているとされるシンテエジブ（魂の家）を持って踊る。いよいよ巫女に死霊が乗り移って死者の詞を口に出す。巫女にとって遺族を如何に泣かせるかが一つの重要な術でもある。イタコの仏の口寄せに相当するところである。最後に悲しみだけではなく、未婚の死者も結婚したので、おめでたいことで、見物人たちも前に出て踊ったり歌ったり宴会の雰囲気になる。

⑧ ノツドンウグツ（真鍮製の甕一將軍グツ）：巫女による唯一の神がかりの面影が見られる次第である。死者の身体とされる人形（ひとかた）の切り紙やお金を入れた甕を巫女が口で噛み持ち上げる。人間の能力では口で噛んで持ち上げることが不可能な重い真鍮製の甕を如何にも軽く噛みあげるのである。神が乗り移っている表象でもある。神霊の威力を見せる場面である。遺族やお客たちは甕のなかに金銭を入れ祈願する。

⑨ バルウオングツ（発願グツ）：バリデギ（捨て姫）の物語が杖鼓（ジャンゴ）のみの囃子で長々と続くのである。この次第になるとすでに深夜になり、見物人も少なくなる。バリデギの物語の内容を簡単に紹介する。

昔、ある大王には一人の王子がいた。その王子が一五歳になったとき、占い師に王子の結婚について占ってもらった。占いの内容は王子が当年に結婚すると七名の姫が生まれ、当年でなければ三王子が生まれるということであった。しかし、大王は占いを無視して当年に王子を結婚させた。それから王子は王位に着く。王には占い通り七人の姫が生まれた。男の子が欲しがっていた王は最後に生まれた姫を捨ててしまったのである。捨てられた姫という意味で「バリ公主（捨て姫）」という名前がつけられたのである。海に捨てられた姫に亀が現れ龍宮に連れて行なった。姫は一五歳まで龍宮で育てられた。そのころ姫を捨てた王の夫婦は病気で死に掛かっていた。王夫婦の病気を治すためには仙界にある不死薬を飲まなければならないというのである。六人の姉妹たちは

不死薬を得るのは不可能であると断念していた。しかし、その話を聞いた七番目の捨て姫は、両親の不死薬を得るために旅をする。苦労を重ねて仙界に入り、仙人と結婚して三人の子供を漸く薬を得ることが出来たのである。不死薬を得て両親のところに来ると、両親は既に死んで葬式（野辺送り）が行なわれるところであった。捨て姫は不死薬を両親に飲ませ再生させたのである。捨て姫はその後ムーダンの守護神になる。再生させる捨て姫の物語は死霊祭には必ず語られるようになったのである。

⑩ アンズン（座り）念仏：僧の姿の男巫が祭壇に向かい座って小鉦を持ち鳴らしながら念仏を唱える。見物人はほとんど帰宅しているし、他の巫女達も遺族の部屋に帰って休む。これが終わると死者である息子と死霊結婚した嫁の人形を祭壇の下に布団と枕を用意して初夜を寝かせる。グツ堂にはだれもいなくなつて静かになる。念仏を唱えた男巫も遺族の部屋にいつて休む。日の出の頃である。

⑪ ソン（立つ）念仏：朝八時頃に男巫がアンズン念仏と同じ姿で祭壇に向かい立つて念仏を唱える。村人達がグツ堂に集まる。

⑫ デエザビ：村人の中からデエザビが選定されている。デエザビは神霊のヨリマシである竹（笹）を握って立てる人をいうが、死霊儀礼の場合は死霊のヨリシロとして竹ではなく死霊が宿る神胎家（シンテエジブ）と称される籠を持つ人をいう。デエザビがその籠を膳床の上に置いて持つ。その傍らで巫女が銅鑼を鳴らしながら死霊が降りるように祈る。暫く続くと、いよいよその籠が動きだす。段々激しくなると、デエザビが立つて籠の動きに従つて追う。一種の神がかりである。籠を持つデエザビがトランス状態であるか否かは確認できないが、籠の動きは死霊が乗り移つた証とされる。巫女がデエザビを鎮定させ座らせて死霊の意志を聞く。デエザビが託宣するのではなく巫女の質問に籠を左右上下に動かして答えるのである。遺族はその傍で死者に聞きたいことを巫女に頼むと巫女が質問し、籠の動きによって答える。死霊の託宣を聞いてから死霊を送る。これに引き続き祭壇に置かれてあつた菅笥を巻いたものを取り出し開く。菅笥の中には死者の魂とされる人形の切り紙が入つてある。開いた菅笥の上に米を敷き、人形の切り紙をその上置く。祭壇に飾られている紙花（造花：蓮花）を一本持つて人形の切り紙を吊り上げる。吊り上がらないと吊り上がるまで繰り返す。吊り上げるとまわりに座っている遺族の前に動かす。切り紙が遺族の前に落ちると遺族は切り紙を懐に入れておく。後には祭壇の造花に貼る。切り紙がよく吊り上げられると死霊があゝの世に

無事に着いたとされる。この時菅筵の米を取って占いをする。村人も占ってもらうのである。死霊も無事にあの世に着いたのでめでたい歌で賑わう。

⑬ 龍船歌、花歌、灯歌：グツ堂の隅に飾られている船（龍船）に白木綿を括り付け、それを揺らしながら歌を歌う。死霊があの世に渡る船とされる。巫女たちが皆出て花をもって踊る。巫女が灯を持って投げたり回したりしながら踊りが続く。この灯は竹で枠を作ってまわりを色紙で貼ったもので、日本の神楽に見える天蓋（白蓋）を思わせる。大きさが異なる数個の枠（四角、六角など）を連ねた形である。

⑭ 道分け（ギルガルム）：白木綿を広げ両端を助巫に握らせる。その上に人形の切り紙や、死者の写真などを置いて往復に動かす。死者があの世に往く様態を示すのである。遺族や村人はその白木綿の上にお金を出しておく。死者があの世に旅するとき使われる旅費とされる。最後に白木綿を縦に割って中に入り、体を前進させて二つに割る。その白木綿を持って踊ってから終わる。この白木綿を割るのをあの世とこの世の因縁を切ることを象徴する行事であるという説もあるが、白木綿自体はあの世に繋ぐ道の象徴である。

⑮ グツに用いた造花や灯や、その以外供え物を海岸に持って行って燃やす。グツ堂の入り口に置いていた（焼物甕）を大きい音が出るように砕いて壊す。

男巫は燃やしている傍に立って炎を向かって、コエンゴアリ（鉦）を叩きながら最後の念仏を唱える。そのあいだ、遺族と他の巫覡たちはグツ堂を片付ける。

終わって、遺族の自宅に戻って来て休憩と食事をする。その時、当主（遺族）は引越する予定なので、引越しの日時について巫堂に聞いて貰う。その占いは神の力によって、答えるものではなく、日付で、占って教える。そして、グツを行なう前に契約した経費等を勘定して終了。

今まで、韓国の東海岸の一带で行なわれる死霊祭であるオググツの一例を取り上げてみた。

巫俗儀礼（グツ）にはさまざまな楽器が用いられ、歌や踊、物語など様々な要素が含まれている。死霊祭には遺族にとつては大変悲しいことであるが、そこには悲しみばかりではなく、笑いもあり、喜びもある。現代的な感覚ではありえないことであるが、死霊祭は結局、死者をあの世に安らかに往かせるための供養の儀礼であるが、生者のためのものでもある。二度と事故死が起こらないようにという願いも含まれているのである。

(2) 洗魂と洗骨（シッキムグツ）

シッキム（洗い）グツは韓国の南西地方、特に島嶼地方に分布されている、巫女（ダンゴル）によって行なわれる死霊儀礼である。シッキムというのは洗う又は清める意味で、死体を清める事で洗骨葬という葬儀との関連性が指摘される。シッキムグツは行なわれる時期によっていくつかに分類される。時期によっては、ジンシッキム、マルンシッキム、ゴアツモリシッキムに分類される。ジンシッキムのジンは湿る意味で、死んでからその死体がまだ乾かしていない状態に行なわれる儀礼である。龍王グツともいって海で死んだ人のため満潮の時や、移葬するときや石碑を建てるときも行なわれる。移葬というのは、死者が出ると仮埋葬をして、二、三年経ってから正式に葬式を行なう複葬制、または二重葬制（洗骨葬）のことである。即ち、仮墓（草墳）は平らげた底に小石を敷いて棺を置く。その上には藁で作った屋根を覆い、風に飛ばされないように十字に結び両先には石を結んでおく。二、三年経ってからその草墳を掘り起こし本格的に葬式を行なうことである。棺頭（コアツモリ）シッキムはその語通り葬儀のとき棺の前で行なわれる葬送儀礼である。マルンシッキムは死後一年、三年、等に忌み明けの日など日々を選定して行なわれるのでナルバジシッキム（日定めシッキム）ともいう。マルンは乾かす意味である。

巫女による巫儀は一定の次第が決まっている。シッキムグツは他のグツ（招福儀礼、商売繁盛のための儀礼、病氣治癒のための儀礼など）と同じ次第の中で、特別に葬儀に限って行なわれる次第を加える形をとっている。葬儀であっても基本的なグツの次第は同じである。巫儀場のグツ堂を清める部分、遺族の安全や幸福を祈る部分が含まれている。シッキムグツが死霊儀礼であるから死者とかかわる部分をもっとも重要視されるの言うまでもない。地域や巫女によって次第の順序は異なるのがあがるが、内容的に



は大同小異である。

一九七四年全羅南道珍島郡内面屯田里で一年目の忌み明けのとき行なわれたのを李杜鉉が報告した事例（李杜鉉「葬制と関わる巫俗儀礼」『韓国民俗学論考』学研社一九八八韓国語版）の筋を翻訳して提示しておく。その次第は次のとおりである。

① アンタン（グツ）② 竜王迎え③ 魂迎えグツ④ チョカマン⑤ 引き上げ⑥ ソンニム（客）グツ⑦ 帝釈グツ⑧ 祖先霊送り⑨ 厄祓い⑩  
ゴプリ⑪ シツキム⑫ オグ祓い⑬ 十王プリ⑭ 魂プリ⑮ 同甲プリ⑯ 薬プリ⑰ 魂引き上げ⑱ 第一六甲⑲ 道開き⑳ 冲天

①から⑨までは一般の巫儀でも行なわれる次第である。⑩ゴプリの以後がシツキムグツのみの次第になる。まず、巫儀を行なう理由を祖先に告げるアンタンから始まる。魂迎えグツは他所で死んだ人の魂を迎える次第である。チョカマンは言葉通り「招神」の意味で、当巫儀の対象である死者の霊を始め、祖先を迎える場である。引き上げは迎えられた死霊や祖先霊を遊ばせる内容である。ソンニム（客様）は疱瘡神に対しての次第、帝釈グツでは家内安全と長寿を祈り。祖先霊送り、厄払いまでは直接死霊祭とは関係なく、家内安全や、治病、財寿を祈願する巫儀にも行なわれる。引き上げや、竜王グツなどは海で死んだ祖先霊がある場合のみ行ない、ない場合は省略される。即ち、巫儀は目的によって、または、祈願者の都合によって儀礼の次第は加減される。次ぎからはシツキムグツ（死霊グツ）のみに行なわれる次第である。

⑩ゴプリは白木綿の片方に祭場の鴨居柱に括り付けて七目の結びを作る。屏風の上に掲げて死者床（死霊のための膳机）の上に垂らす。他の例によると、鴨居の柱に括り付けた白木綿に米を入れた器を包む場合もある。白木綿の片方を巫女が握って巫歌を歌いながら、その白木綿を揺らし振ると結び目が一つ一つ解けるのである。それが解けると白木綿を両手でもって踊る。ゴプリ（結び解け）は死霊儀礼以外にも、家内に心配されることがあったり、占いするときもゴプリが行なわれる。家内に患者がある場合は白木綿を患者のものとして結び解けをするし、占いときは依頼した人の名をあてて行なわれる。それは死んだ人が生きている間

に残した恨みを、布の結び目を解くことによって、その恨みも解けるといふ感応呪術の一種である。

日本の神楽のなかでも「布舞」や「帯舞」があるし、特に紐の結び目を解く内容の神歌がある。渡辺伸夫が宮崎県椎葉村の『広報しいば』に載せた「椎葉神楽発掘一・二・三 願の紐」の条から引用すると、(注36)

このほどはむすびこめよく願の日も 今こそとくる神の心 (銀鏡神楽)

御祭かねてつらぬくこの御高屋に申置きたる願いの日も今より上世とけてまします (椎葉村竹の枝尾神楽)

此の程は結びて掛けしひたら帯 とけよ鹿島の神のちかいに (藺牟田神舞)

喜びの願成の紐を解くおりはせんぶのまをも何か惜まん (隠岐神楽歌集：日本庶民文化史料集成)

渡辺は「願いの日も」の「日も」は紐であることを指摘し、これらの歌は願神楽の意趣がしめされているという。願神楽によって神の心がとけて(祈願がききとどけられて)願をかけたしるしにむすんでおいた紐や帯がとけますようにとっている。隠岐神楽に病氣平癒などの祈願がある場合に限って舞われる「布舞」はシツキムグツのゴプリと余りにも似ている。牛尾三千夫が『神楽と神がかり』に記した隠岐神楽の布舞の様態を要約して提示すると次のようである。舞人が一反の白布を一尺五、六寸の紐で結んで持つて出て、結んだ紐を解き、布を一巻きくらい身体に巻きつけて解く。布を手でたぐり、その片端のたぐった布で千鳥に巻き、右手に五、六尺たぐったのを持ち、左手に残りを持つて舞う。左手で布の残りを前方に投げる。布をひねって舞う。その布舞の間には神歌が歌われる。渡辺伸夫はその他の布舞の例として広島県生口島の名荷神楽、三原市の妙見神楽などを取り上げて紐(布)を解けることは願解きの意味であると解釈している。

備中、備後神楽に一人の太夫が長い白木綿を打ち振り打ち振り舞ううちに突如神がかりする場合がある。長門大津郡三隅町兎渡谷(トドロク)では「帯舞」のとき、舞手が帯を両手にもって舞うと囃子方が「やれ舞え、それ舞え」といって囃すと、それにっれて舞手がきりきり激しく舞うとやがて神がかりするという。(注37)

備中の平川では一反の白木綿を解きほどこき、その一端を木の先に括り付け、ゴーヤ、ゴーヤと唱えながら、その木をくるくる丸く廻し、又、波形に廻し、その長い布が畳に付かず空中で丸く波打ち続けるように舞をつづける。吉備郡水内村の堂砂では、白木綿を柱から柱へ張り渡し、その下をゴーヤ、ゴーヤ、ゴーヤサンヤと唱えながら、何度も何度も丸く廻る。(注38) 大元神楽にも「帯舞」という一人舞の曲目はある。形態は違っても最初は同じ発想ではなからうか。

「ゴプリ」が終わるとつづいて「シツキム」がはじまる。「イヨンドンマリ」とも称する死者の身体を作る。菅筵に死者の衣装を入れ巻いて七つ目を紐で結んで立てる。その上に荷を戴くとき頭に乗せる輪型の下敷を置いて、その上に麴の塊と、死者の人形の切り紙が入った器を置いて釜の蓋を覆う。巫女が神刀(シンカル：刀の柄に紙束が付けられている)をもって釜蓋を叩きながら巫歌を唱える。用意してある蓬水、香水、清水で釜蓋を洗う。箒で洗ってからきれいに拭く。これを露祓い、沐浴させる、洗うともいう。菅筵を巻いたのを死者の身体として扱うのは東海岸地方の死霊巫儀にもある。東海岸地方の巫儀にはその菅筵を巻いたのもって踊るのである。

他の事例によると、釜蓋を洗ってから神刀で釜蓋を叩くのである。それはあの世の門を開くという意味があるという。遺族達はそのイヨンドンマリという身体を掴んで哭する。釜蓋を開けてから、巫女が神刀で水が入っている瓢を叩いて、用意してある水が入っている甕に落とす。イヨンドンマリの上に置いてあった魂の切り紙が入っている器をもう一回洗う。それを瓢にいれて甕の水に浮かす。その瓢は船で、甕のなかの水はあの世に渡る川とされる。死者が瓢の船に乗ってあの世に往くことの設定であるという。巫女は神刀で瓢をゆっくり廻す。遺族たちから船代としてお金をもらって瓢のなかに入れる。お金をいれると急速に廻される。早い速度にあの世まで渡られるという。魂器を引き出して遺族に渡す。魂器から人形(ひとかた)の切り紙を出して遺族の頭の上に置く。神刀の柄に付いてある切り紙束で吊り上げる。吊り上げられないと吊り上げられるまで繰り返す。神刀と人形の切り紙を手にとって踊って終わる。遺族の頭から吊り上げることは死霊が遺族から完全に離れることという。

この次第は神楽の「莫塵舞」との関連性との示唆点をもたらすところでもある。前も記した新潟県の葬送儀礼の菅筵を死体で覆うことから伺われるように「莫塵舞」の莫塵も、シツキムグツの死者の身体を象徴するイヨンドンマリも、葬送儀礼の菅筵も本

来は同じ意味ではなからうか。この問題は神楽の神座（かむくら）にもかかわるので、もっと詳しい研究が要求される。

「ギルダクム（道開き、又は道清め）」は死者の霊が往くあの世までの道（橋）を整えることである。白木綿（シルベともいう）の両端を遺族、或いは助巫につかませて、家の外側に向かつてひろげ渡られる。その上に死者の着物やお金、米が入った籠、魂箱（ダンソクともいう）をあげて置く。巫女が米を散り撒きながら神刀をもって巫歌を歌う。魂箱を前後に押したり引いたりしながら念仏を唱える。それが終わると家の外側から白木綿を取りつかんで遺族達に慰勞の祝願をする。死霊もあの世に安らぎに行なつたので遊んでいこうといつて賑やかに踊る。お客である村人達も出て一緒に踊る。シッキムグツには巫女による神がかりはないが、もし、遺族たちが死者の言葉を聞きたい場合、遺族にシンデエ（あるいはソソデエともいう）というヨリマシである木の枝を握つて立てると巫女が傍らで祝言を唱える。まもなくシンデエが震えて、それを握っている人に死霊が乗り移つて死者の言葉を口にだすのである。日本東北地方のイタコの口寄せに比される。

「道開き」の次第は降神巫の儀礼にも、東海地方のオググツにもあるように巫儀で広く見られる。この白木綿は死霊があの世に渡る道（橋）とされる。白木綿ではないが死霊があの世（黄泉）に渡る道として、濟州島のシワンマジ（十王迎え：濟州島には死霊儀礼をシワンマジという）にもある。竹を細く拵えたものを並木のように二列に並べさして、その造られた道を箒で拭いたり、水を散らして洗う。その道は海に向つて立てられるのである。死者の世界は海である他界観が想定されている。象徴的な道によつて、あの世に旅立って往くことになっている。

以上の道は死者があの世に安らかに往けるようにする象徴的な道である。その道こそこの世とあの世を繋ぐ境界であると言えるだろう。死霊巫儀を行なう為にはまずその死霊を呼んで、その死者の怨みを解いて和らげ、あの世に送る葬送儀礼の構造をもっている。死霊巫儀を行なう理由は東海岸地域のオググツでも言及したように、死霊は人間に祟りをもたらす荒々しい存在という思想があつて、儀礼によつて和らぐ存在に変えさせ、あの世に送るのである。儀礼の前後に死霊の性質が変わる事が想定できる。死霊は祟りをもたらす存在であるが、儀礼による供養すると人間に福や家内安全を守つてくれる善の存在に変わるのである。大元神楽が祖先加入儀礼であることと同じように死霊が善神（祖先神）になるのである。

シツキムグツは死霊を呼び出してこの世に未練が残らないように恨みを解き、あの世に送る儀礼である。道開きによって死霊をあの世に送ってから最後に呼び出された死霊と神霊に付いてきた諸雑神にもてなしして、儀礼に使った物々を燃やして終わる。死霊は人間に善悪の影響を与えるという思想がある。死霊祭は必ずしも葬儀や霊祭の時だけではない。特に島嶼地方には海と深く関わっているため、豊漁祭の時にも死霊祭が行なわれる。すなわち、海でなくなった霊を祭ることで海上安全と豊漁を祈願するときに死霊祭の一部分に加えられるのである。

### (3) 葬儀と遊び(ダシレギ)

葬儀は死者との別れの儀式なので、悲しい雰囲気で行なわれるのが一般的であるが、わざと人を笑わせる滑稽な寸劇を披露する風習がある。それがダシレギである。ダシレギが現在唯一伝承されているのが珍島地域である。ダシレギは巫堂(ダンゴル)の組織であった神庁を中心に専門的な芸能人によって伝承されてきた寸劇である。死者が出ると喪輿(ひつぎを乗せる輿)を担ぐ人々が集まる。喪輿を担ぐひとは村人たちで、日本の結(ゆい)と類似する村落共同体的な性格を持つ。通夜にはその人たちが集まり、専門芸能人(注39)を招き、喪主を慰め、喪輿を担ぐ人々を楽しませる笑劇が行なわれる。

ダシレギが行なわれるのは特に裕福な家の好喪の場合である。好喪というのは不幸死ではなく、生前に裕福な生活を送り、若死ではなく、与えられた天命を尽くし長寿した人が子孫が見守るなかで自然に死を迎えることをいう。人生の中で最も幸福の一つといわれている。では、葬儀の時行なわれるダシレギがどのように行なわれるか紹介する。(注 40)

① 黨遊び・寺党とは朝鮮時代、各地を流浪しながら歌や舞を見世物にして暮らした女芸人、またその連中をさすが、ここでは、まず太鼓を奏するところからはじまる。有る程度盛りあがると、歌い手が歌いだすと、歌の後ろ部分を皆が歌う。最初は緩やかであるが、段々急拍子になる。そのとき歌は大部分 民謡で、機織謡(ムルレ打令)、サンアジ打令、珍島アリラン、デウンダシエ打令などがある。歌うときは鼓踊り(ブクチュム)、立鼓踊り(ソルザンゴ)などの踊りも伴う。

② 使者遊び(サジエノリ)：一種の狂言風の寸劇である。新野雪祭りのサイホウが被るような方錐形の突起された帽子を被った都

使者（使者の頭）が登場して書冊を開き見て、日直使者、月直使者を呼び出す。何某住んでいるコンバンウルという奴は親不孝して、兄弟同士が仲悪く、親戚の間でも不睦し、欲が多すぎ、他人の財物を欲張り、村の婦女をからかい、あらゆる悪事をする奴を捕って来いと命令する。兵卒の姿の日直使者と月直使者が「はい」といいながら、場内を一回り走り廻ってからコンバンウルの業績を調べる。コンバンウルは親孝行で、兄弟同士仲良く、親戚の間では睦目し、人情が深く、良い人であることと判断される。それほど、良い人を捕まえていくわけにはいかないから、都使者の所に来て、以上の事情を話して、書冊をもう一度確認することをねがう。都使者は書冊を確認してみたら、何某のコンバンウルではなく、向かいの隣村のコンバンウルであることを確認し、隣村のコンバンウルを捕まえてくることを命じる。日直使者と月直使者は隣村に向かって走る。隣村にいったら、村人がコンバンウルは許すことができない悪者といい、莛卷（罰として莛の中に人を入れてまき、それを叩く）をしている。日直使者と月直使者はあの世からコンバンウルを捕まえてきたという、村人はコンバンウルを渡す。コンバンウルは日直使者と月直使者の前で泣きつつ自分の身の上話をしながら嘆く。コンバンウルの妻も出て、主人が亡くなると一人で子育てしながら生きていられないと泣き崩れ、その身の上話を歌として歌う。

③ 喪主遊び：セムシに扮した男が杖に頼りつつ、囃子を囃したて、セムシの踊りを滑稽に踊りながら場内を廻る。しばらくセムシの真似を見せる踊りを踊ってから、集って人々に向かって、「我が村のコンバンウルが死んだので、一緒に行きダシレギをしよう」と提案する。村人は「そうしよう」と答えてコンバンウルの家に行く。コンバンウルの家では仮喪主が「アイゴ、アイゴ」と泣いている。弔問客が仮喪主にお辭儀をしても返事もしないで食べ物ばかり食っている。弔問客は怒り帰ろうとすると、仮喪主は弔問客を止めて、「何日間泣き放しだったので、お腹が減り、弔問したことも忘れた」と言訳する。今回は真喪主のところに行き、「ほら、貴方の家に慶事があつたそうだな」という。弔問客とセムシ役が「両親がなくなり喪にいるひとに、慶事だて、なにことだ」と戒める。仮喪主は「あなたたち、良くわからないね。昔人の話を聞いたことないか。田圃を売るよりは口を一つ減らすほうがましだということ。このような凶作の年に、食い物ばかりたべる老人が死んだのだからそれより慶事なことがあるか」という。また、真喪主のところで行き、「私がここまで来たのだから喪主と賭けごとをしたい。なんのことか



いうと、我らがダシレギをして喪主を笑わせると、ここに集った人々に鶏御粥を食べさせてくれることにし、(李杜鉉採録本では「もし喪主が笑わせないと我ら才人達の賃金を貰わないことにする」というのが添加されている)といいながら戯れる。集った人々に向かって「喪主がするように約束したね。ではダシレギをしよう」と叫ぶ。そうすると囃子に合わせて盛りあがる。そのとき盲目が妊婦の妻を連れて杖によりつつ登場する。

④ 盲目(ボンサ)遊び：盲目が妻に向かって「人々が多く集ったか」。妻「恐ろしいほどあつまっていますよ」。盲目「ここはどこなの。宴会の家か」というと意外な盲目の言葉に笑いが飛ぶ。それから自分も盲目なのに、盲目の真似をする。「ある盲目が酒を飲み酔ってこのように歩くのね」といいながら滑稽な歩き方、見えない白目をまわしつつ。煙管を探す真似、小便を服に塗らした真似。妻を捜しながら女性と抱き合おうとするなど、多種多様な滑稽の真似芸を疲労する(李杜鉉採録本では 盲目が小便をしようとすると仮喪主が前にふさがる。「白昼に何が出て小便することを邪魔するか。いや。坐って大便まで出してしまおう。」と坐る。坐って大便しながら煙管を出して火をつける。煙草の火に手を出して尻もちをつく。便をだしたこと知らずになにか尻もちについても手に付けて臭いをかいてみて「これはなんの臭みや。味はどうなのか」といいつつ味見してみる)。僧が木鐸を叩きながら登場する「南無阿弥陀仏 観世音菩薩」と唱える。妻が僧を遠いところから見手招きして一緒に戯れる。セムシ役が太鼓を持ってきて盲目の傍に置き、盲目の真似をしながら経を唱える。経といっても仏経や道經のような経ではなく、砕けた経である一部を紹介すると「物乞いして食いすぎ、腹が割れて死んだ奴。お前も食って去れ。冬至の師走、寒い日に人妻と戯れ、鞆丸が凍って死んだ奴。お前も食って去れ。妻を他人に奪われ、あちこち探しに出かけた盲目、川に落ち溺れて死んだ盲目鬼神。お前も食って去れ」。ここで「食って去れ」というのは一種のお払いの言葉である。盲目はそのような砕けた経をきいて「良い経を唱える」とほめる。セムシ役は私が誰か知っているかとたずねると盲目は「もちろん、知っている。雄犬が雌犬を追いかけするように僕の妻の尻尾を追いかけている隣村のセムシではないかといひ。妻を呼び出す。僧と片隅で戯れていた妻が慌てて出てきて「呼んだのか」といひ。盲目が「どこに行なったか」といひ、妻は「糞出しに行なった」。盲目「なんでそんなに長い」。妻「小便もしなくちゃ」。盲目「小便別。大便べつかよ」。妻「小便穴と

大便穴が別々だからな。どうやって一緒に出来るの、大便は後ろから出すし、小便は前から出すからな」と卑猥な問答が続く。盲目「なにか こつくりこつくりしているのは何だ」。妻「それはセムシが意氣揚に踊るからなのよ」。盲目「ちくしょうめ。そのセムシという奴、村の寡婦という寡婦とは全部誘い出すから、お前も気をつけよ」と戒める。セムシと僧が盲目の傍に来て、お互い機会を企んでいる。セムシは空咳、僧は「南無阿弥陀仏 観世音菩薩」と念仏する。盲目「お前たちは何しに来たの、このやろうめ」といいながらセムシと僧の胸倉をつかんで喧嘩をうつ。しばらく転がったりした後、妻を向かって「お前、セムシと僧に会って陰行を尽くしたから、これから僕と行くところがある」といい、妻を連れて退場する。(注41)

⑤ 喪輿遊び：拵えている空の喪輿を担ぐ人達が担ぎ、唱者(前唄者)の指揮によって庭を廻る。そのとき唱者が唄を歌いだすと担ぐ人達(喪徒軍、香徒軍)は鈴の音に足を揃え踏みながら唄の後尾を歌う。コエンガリ(鉦)太鼓などの楽器が加えられる。唄には足踏みの唄、ゆつくり進行する唄、早く行進する唄、墓の封墳を固める唄などがある。喪輿遊びが終わると喪家ではご馳走をだし、明日の喪輿の担ぎを頼む。その後、死者が生前使った遺品などは門の外側に出して燃やす。

出棺の前日の夜、すなわち通夜に行なわれるタシレギは一定の脚本はあるものの、即興性が強く、笑いを誘うために様々な卑猥的な要素も多く含まれている。タシレギのような専門的な芸人ではないが、出棺の前日夜には多様な遊びを伴ったのである。その一つが喪輿遊びである。香頭群たちが空喪輿を担いで村を廻りながら、村の人々に模擬の挨拶をしたりして、喪主を慰める歌舞や物まねなどの芸能を行なったのである。

地域によってセンヨドデウム、ソンモデウム、ゲエドデウム、デエテウリなどその呼び方は多様であるが、死が必ず悲哀なものとして捉えていないことがわかる。葬儀のとき行なわれる芸能によって、死後観をみる事が出来る。

#### 5. 小道具を通してみた葬送儀礼と神楽

今まで、葬儀の時行なわれる諸相を日本と韓国の事例をとおして概観してみた。葬儀の芸能ではなくても、一般の神楽のなかに

は、葬儀で用いられる小道具や、それが持つ意味がそのまま、または応用した形で神楽でも使われている。現行の神楽のなかで見られる所作や道具などを通して、葬送儀礼と関連性を考えてみたい。

(1) 口元につける水

高千穂神楽の「地割り」という演目で、荒神は素盞鳴命または猿田彦、幣挿しは太玉命、弓舞は月夜身命、太刀舞は武甕槌、神主は児屋命の五人舞となっているというが、一九九五年正月一日高千穂町浅ヶ部で行なわれたときは、弓舞が二人、太刀舞が二人で四人舞であった。荒神は右手に扇、左手に棒（杖）、帯の片襷、背中に榊の枝を挿している。幣挿しと神主は素襖、烏帽子、右手に鈴、左手に大幣をもつ。弓舞は帯の襷、弓矢と鈴、太刀舞は帯の襷と太刀と鈴をもつ。仮面を付けたのは荒神だけで、他は素面である。四人が舞をまったら、荒神一人舞がしばらく続く、そして、神庭の隅に置いてあった鞆俵を二つ出して、荒神と神主が俵の上に対座し問答が行なわれる。荒神の役は面を脱いで拝んでから、神主が持っている幣の切り紙をとって、用意した神酒を浸けて仮面の口元に塗る。(注42)

ここで注目されるのは最後に荒神の仮面を外して、神酒で口元をぬることである。何故荒神面の口元に神酒を付けるのか。これは「柴荒神」でも同じである。荒神と一緒に神酒を交わすことで、神人交流の作法であるともいえる。

しかし、これと似た場面が葬儀で見られるのが注目される。「末期の水」といって、死者の唇をうるおす作法がある。

井之口章次は『日本の葬式』(注43)で、「末期の水」は「魂呼び」と同じように死にかかった人を生き戻すための作法であるといっている、次のように事例をあげている。

- ・ 人が急死で死になつたときは呼び戻すといつて、その人の顔に水をふきかけながら枕元の屋根の上にあがって、屋根をはぎながら、家の中のその人に向つて、その人の名を大声でさげふ。名前改めをした人は旧名を呼ぶ。すると死にそんな人が生きかえるといわれる(和歌山)

- ・ いきが切れてから近親の者が水を二べん顔に吹き付けて、「誰それさんもどるか」という。よびかえす意味とされる(徳島)

・ 湯灌にとりかかるまえ、近親の者が酒をのみ、死人の顔にもその酒を吹き掛けてから湯灌にとりかかる。(吉岐島)

・ 筆に水をふくませて、唇をうるおす。鳥の羽根や綿や紙や檜・柳の葉などで水をふくませ唇を潤す。

一方、五来重は「末期の水」は絶命した直後に近親者が筆に水をふくませて死者の唇をうるおす儀礼で、臨終にあたって去ってゆく魂をよびもどして蘇生させる「魂呼び」とは違うという(注44)。五来重は井之口章次とは別の事例をあげて、蘇生の例外的な伝承はあるにしても、儀礼としては死者の浄化による死霊の浄化のために、浄水をもって口をきよめる。

「末期の水」が生き戻す蘇生の作法であり、浄化の儀礼であり、いずれにしても、高千穂神楽の「地割り」で荒神面の口元に酒を付けることは同じ発想から生じたのではなからうか。

## (2) 米・俵・飯

神楽と葬儀で共通的に用いられる飯、俵などの小道具がある。神楽において米とその入れ物である俵は欠かせない重要なものである。花祭りの天蓋のなかに蜂の巣という米包みをいれることは周知のとおりである。神楽が行なわれる途中に米を撒いたり、餅を投げたりする事はよく見かける。中国地方の神楽には必ず俵が置いてあるほど重要な役割を果たしているのである。俵に幣串を挿して置いたり、俵に座って神がかりが行なわれるところもある。大元神楽にも天蓋の中に米包みと神名が書いてある紙をいれる。天蓋降ろしの時その米が散り撒くような仕組みになっている。それもやはり米である。同じ仕組みでなくても神楽に米を用いる例は甚だ多い。

神楽において米あるいは米の入り物である俵をなぜ用いるのか。その答えは葬送儀礼にあると思われる。人が死ぬと先ず飯を造って、死者の枕元に置くのである。その飯の造り方は地方によって異なっても、必ずといっていいほど枕飯を用意するのである。そして、それを墓まで持って行って死体と一緒に埋めるか、または墓の上に置き、鳥や他の獣が食べるのが好ましいともいわれている。その枕飯は死者の魂を呼ぶ力があると考えられているからではないだろうか。魂呼びは、死者が出ると近親者が屋根の上に乗って、東方面に向かって死者の服を振りながら死者の名前を二・三回呼ぶのである。

徳島県の東祖谷山村や一字村、木屋平村などでは息を引きとろうとすると、あらかじめ用意しておいた青竹の筒に米を入れて振り「早う元気になれや 元気になれや」と大声でさげぶと、意識を取り戻すこともあったという。また、屋根の棟の上にまたがって「誰それ殿 もどらっしゃれ」と大声で呼ぶ時にも米や麦を盛る斗杓の底をカンカンと叩いて、その音によって遊離しようとする霊魂をよびもどそうとするのであった。食物の音とか食品の音は霊魂を再びこの世に呼び返そうとする力を持っていると、昔の人は考えていたのである。(注45)

「魂呼び」の時の米と、枕飯の米は同じ機能を期待するものの、その役割は異なるのではないだろうか。「魂呼び」の場合に使われる米は死にかけている人を、死の前の段階で生き戻すための機能とおもわれるが、枕飯は死者を生き返すというより、魂が漂わないで、死者の体に落着けるためと思われる。従来死者の魂を体に戻すことは生き戻す、或いは再生という考えが支配的であったようである。魂を呼ぶのはこれから正式に葬送儀礼を行って、魂を浄化させて、死霊がうろつかないようという思想から生じたのではなからうか。即ち、米が再生の力になるというよりも、もてなしの意味も含めて、死霊があゝの世に往けないで、この世にうろつく事になると、人間に災難をもたらす祟りの原因になるから、死霊を死体に付着させる役割を枕飯が果たすと思つたのではなからうか。葬儀が終わると死霊が人間の世界にうろつかないで神霊の世界に帰す所作が大事にされることから考えられるのである。葬儀後の行事としても死霊が帰ってこないようにする風習が見られる。

例えば、出棺の場合玄関からではなく縁側から出すとか、棺が出ると死者の生前に使つた茶碗を割ることも、死んだ以上、帰ってこないようにという願いが込められていたと思われる。人の出入り口と死者の出入り口と異にすることも考えられるが、死者が再び戻ってこないようにさせるための意味もあると思われる。

韓国の巫俗儀礼の中で死霊祭(オググツ)の際、死者の生前に使つた米甕を死霊祭の最後に音が出るように砕いて割る風習がある。そのような象徴的な所作は死者が食べる米はないからこの世に対する未練を抱かずにあの世に往くようにという願いが込めら

れていると解釈されている。一方、日本枕飯のように韓国では、使者メシ（サザバプ）というのがある。使者というのは死人をあ  
の世に連れて行く閻魔大王の使者とされている。使者メシはご飯三杯と酒三杯、干したメンタイ三尾、若干の金銭と白紙一卷を御  
膳に供え蝋燭をとす。（注46）死人を連れて行く使者に対する遺族の願いが込められているのである。飯と関連して、民間習  
俗にコシレ（コスレ、コシネともいう）というのがある。田圃で仕事中の昼飯や遠足などで屋外で食事をするとき、食事する前に  
飲食を少し取り、コシレといながら捨てるのである。飲食前に地神や水神にまず捧げる、または屋外で食事するからそれに集ま  
ってくる雑鬼に捧げてから食事をすると食中毒など食中りがないといわれている。いずれにしても、食物は見えないモノ（霊）た  
ちも食べたがり、集まってくるといわれている。使者と死者は発音上同じくサザという。日本の枕飯と韓国の使者飯は同じメシで  
あって、その機能的な解釈が異なっている。米（飯）にたいする多少の解釈の差はあっても、神楽や葬儀に用いられる機能性は同  
一であるといっても差し支えないだろう。

### (3) 布と善の綱

神楽の中には「帯舞」とか「布舞」という演目もあれば、布を使う所作がよく見られる。高千穂神楽には女性のきものの帯を襷  
として使われる。大元神楽にも備中神楽などでも布舞がある。布或いは帯が神楽にかなり広く使われている。

布や帯が神楽に使われる理由も葬送儀礼からみることもできると思う。葬送儀礼での布や帯は死体を結ぶものとして用いられる。  
葬送儀礼で死体を帯で結ぶのは埋める棺が甕の場合、死体を入れにくいためという実的な機能もあるが、それよりは死者の魂が  
他の処に行かないようにする仕方とも思われる。その他にも布が葬儀に使われるのは地域によって相違があるが、棺を被せるよう  
に巻き付け、善の綱といって野辺送りのとき遺族たち（女性）が布をもって棺の後をついていくか、或いは前で棺を引く形で布を  
もっていく場合もある。善の綱は本来仏教の仏の御手引きといわれるが、棺に巻き付けた布を遺族が持つて墓まで移動するのは棺  
の中の死霊が他のところに行かないようにという思想もあつたのではなからうか。

布または帯（紐）の神楽、葬儀などの儀礼での機能はおおよそ二通りある。一つは結ぶ機能である。死者の身体を紐で結ぶことは



屍の処理という現実的機能もあるが、死霊が屍から遊離しないように鎮魂させる意味があると思われる。もう一つは野辺送りの時遺族たちが持つ「善の綱」（縁の綱）とも）と称される白色又は紅白の綱は仏教の善所に導く綱として一種のカミミチである。大元神楽で木綿を神楽殿（舞殿）の天井に大元神の身体である藁蛇と一緒に横渡されているのは神の通りミチの設定とも思われる。韓国の巫堂の儀礼で用いられる木綿も、神霊（死霊）を導くカミミチにほかならない。

布と同じ機能をもつと思われるのが莫座（筵）である。莫座は神楽の語源にも関わる問題であるが、出雲佐太神能には莫座舞があつて、莫座替えの神事がある。大元神楽では莫座をもつて、縄跳びするような所作が見られる。莫座が儀礼に呼ばれてきた神霊を祈る場所、即ち神霊の座（場所）といわれるが、本来は布と同じような機能ではなかったのだろうか。

莫座（筵）が葬送儀礼に使われたという高岡功の報告（注47）は重要な示唆点を示す。新潟県岩船郡山北町山熊田という部落で、以前行なわれていた古い葬法があつたという。病人が息を引きとつてもまだ死者として扱わず、布団の上に畳一枚ぐらいの大きさのスガムシロをかぶせる。それから敷布団の上にスガムシロ一枚を二つ折りに敷き、その上に病人を起こし、両手を前に組み合わせてその手首を荒縄で縛る。つぎに足首のところが太ももの処を同じようにぐるぐる縛り、それから着物を着せる。さらにその周囲をもう一枚のスガムシロですつぽり覆う。その形は円錐形又は三角形のテントのようになっていて、スノの処を荒縄で縛り、そこに刀か鎌をさしておく。そして家の者から近所の家々に告げがまわる。報せをうけて村人が拝みにくる。夜は念仏講の年寄りがきて念仏をあげる。一方では葬式の準備がされる。ダミバコ、ワラジ、竜頭その他の道具作りが家のなかで、または穴掘が葬式組みの手でなされる。家族の者は関係せず、村の中の者が総出で手伝う。先のムシロで囲まれた仏は翌日の昼過ぎまでそのままにしておき、以後湯灌となる。その後仏（死体）には白装束を着せ、棺に入れ、墓地にむかう。野辺送りの棺には、善の綱という一〇尺ばかりの白布がつけられ、親類の者がつかまつていく。中に荷担ぎという役があり、仏の生前使った道具一切を入れた箱を白い布で、包んでかついでいる。提灯、花籠、旗、天蓋、竜頭その外が続く。参加者は左肩にイロという三尺程の白布をかけている。

筵で死体を包むのは実用的な機能以外に死者の魂が身体から離れないように包むという機能があるのではないかと思われる。大

元神楽の「莫座舞」でも、舞手が莫座をもつて頭の上のせたり、あるいは体を包んだり、縄跳びのような動きが見られる。相当芸能化され莫座固有の機能性は薄れているが、葬儀の筵の機能との関連性が察される。

## 6. 結び

日本全国に分布されている神楽を出雲系神楽、伊勢系神楽、巫女神楽、獅子神楽などに分類したのは本田安次である。分類の基準としては多少の混乱が見られるが、神楽の特徴をよく掴んだ分類と思われる。いずれの神楽にも共通するのが採物である。採物は多種あるが、鈴や柵をはじめ剣もよく使われる採物の一つである。鈴や柵は神々の依り代としてよく知られているが、剣や鉾などはなぜ採物として重んじられているのか。追儺に楯と剣をもつた四目の方相氏が悪魔や災害を追い払う役から剣の用途をみるこ  
とができる。また、『令集解』に

凡そ天皇崩ずるの時は、比自支和氣等、殯所に到りて其の事に供奉す。仍つて其の民二人を取り、名づけて禰義・余此と称するなり。禰義は刀を負ひ並びに戈を持つ。余此は酒食を捧げ、並びに刀を佩いて、並びに内に入りて供養するなり。唯禰義等の申す辞は輒く人に知らしめず。

禰義(直)が持つ刀と戈は武器の一種には違いない。なぜ、神聖な祭儀の場に武器を用いることになったのだろうか。もちろん三種の神器の一つに剣が含まれているのは周知のとおりである。見られる刀や戈は鎮魂の道具であることは確かである。剣や刀、矛など武器類は人間に好ましくない悪のモノを追い払う道具にはかならない。

ここで一つのエピソードを紹介して結論に代えたい。

現代社会において一般の家庭に強盗が入ってきたと想定してみよう。家には父と母、それからまだ幼い娘がいる。強盗がはいっ

て父親にピストルを突き付け、金品を出さないと殺すと脅迫する。

もし、何百年前にも同じような事件が起きたらどうなるだろうかと思像してみよう。ピストルという現代的な武器を持った強盗に反抗するのは死を覚悟しない限り、強盗の要求に応じなければならぬだろう。しかし、ピストルではなく、ただの棒をもって、しかも身体的にも貧弱な強盗が入ってきて脅迫するなら、強盗を追い払って家族を守ろうとするのは当然のことであろう。

即ち、自分の力では到底及ばない強い強盗にはいう通りにして命を乞うしかない。しかし、自分より弱いと判断すると、家にある包丁でもって強盗に向かって戦うだろう。強盗を抑えたり、追い出したりしようとする。

見えない神霊に対しても同じ現象が起こりうるだろう。どうしても人間の力では及ばない神霊にたいしては、善霊や悪霊に拘わらず供物や神霊が好むもの（芸能など）を奉納して、人間の願いを叶えてくれる方法を選ぶに違いないだろう。しかし、弱くて小さな存在であると認識すると、悪霊だったら追い払いという強制的な手段をとるだろう。もし自分が出来なければ、強盗の場合は警官に頼むように、修験者や神職、巫女、法者など専門的な宗教家に依頼することになる。

天皇が崩じた時に使われる刀や戈は如何なる霊を鎮めるためにつかわれるのだろうか。死が生じると、その死者は直ちに人間界からはなれて、霊界に属するようになる。しかし、死の直後の死霊はまだ不安定な存在で、同界（霊界）のさまざまなモノが集まってくる。集まってくるものの中には害をもたらす存在もある。それを払わなければ死霊は霊界で安定することができない。このような思想は屍身の物質的に汚れを伴うことも一つの理由にはなるだろう。

不安定な死霊を安定した霊界に送る儀式が葬送儀礼であると思われる。葬式が終わった後でも、三年忌、七年忌、一三年忌などのように安定装置を用意するのである。その安定装置の効果を高めるために、さまざまな行事を行ない、芸能が披露されるのである。死霊も神霊も人間と同じく、人間が楽しむ歌や舞を好むと考えられたからであろう。今日、日本では葬儀の場で芸能が行なわれることが殆どみられなくなったが、かつては葬儀に多様な芸能が披露されたことを幾つかの報告事例を通して見てきた。韓国の場合はいまだその名残をみることができている。

死霊にたいして行なわれる神樂を葬式神樂と靈祭神樂に仮に分けて整理してみた。死後三年、五年など年忌に行なわれる靈祭神樂はいうまでもなく、死の直後、即ち、埋葬の前に行なわれる葬式神樂にも、死者を再生させようとする神樂は殆ど見られない。即ち、死霊と関連した神樂の鎮魂はタマフリではなく、タマシズメであることが明らかになったと思われる。

注

注1) 岩田勝 『神樂新考』 名著出版社 一九九二年 頁二九六

注2) 石塚尊俊 『西日本諸神樂の研究』 慶友社 一九七九年 頁一三九

注3) 石塚尊俊 『神樂とシャーマニズム』 『日本のシャーマニズムとその周辺』 (加藤九祚編) 日本放送出版協会 一九八四年 頁二八五、牛尾三千夫 『祖先加入儀礼としての荒神神樂』 『まつり』 二二号 まつり同好会 一九六七年

注4) 牛尾三千夫 『祖霊加入の儀式としての荒神神樂』 『まつり』 二二号 まつり同好会 一九六七年

注5) 五来重 『葬と供養』 東方出版 一九九二年 頁四九

注6) 牛尾三千夫 『美しい村―民俗探訪記』 石見郷土研究懇話会 一九七七年

注7) 松浦康麿 『隠岐に於ける葬祭靈神樂について』 『山陰研究』 遠藤文庫 第二冊 一九五五年

注8) 西角井正慶・倉林正次 『靈祭神樂考―隠岐芸能の一面―』 『国学院雑誌』 一九六〇年二・三月

注9) 本田安次 『神樂』 木耳社 一九六六年、『霜月神樂之研究』 明善堂書店 一九五四年

注10) 五来重 『葬と供養』 東方出版 一九九二年

注11) 以下『隋書倭国伝』までは和田清、石原道博編訳『後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』岩波書店 一九五二年から引用。『魏志倭人伝』「其

死有無椰、封土作家、始死停喪十餘日、當時不食肉、喪主哭泣、他人就歌舞飲酒、已葬、举家詣水中澡浴、以如練沐。」

注12) 『後漢書倭伝』「其死停喪十餘日、家人哭泣、不進酒食、而等類就歌舞為樂」

注13) 『隋書倭国伝』「死者斂以棺槨、親賓就屍歌舞、妻子兄弟以白布製服、貴人三年殯於、庶人卜日而瘞、及葬置屍船上、陸地牽之、或小輦。」

注14) 「一書曰、伊弉冉尊、生火神時、被灼而神退去。故葬紀伊国熊野之有馬村焉。土俗祭此神之魂者、花時亦以花祭。又用鼓吹幡旗、歌舞而祭矣。」『日本書紀』上 坂本太郎「ほか」校注 岩波書店 一九六七年

注15) 『日本書紀』「四十二年春正月乙亥朔戊子、天皇崩。時年若干。於是、新羅王聞天皇既崩而驚愁之、貢上調船八十艘、及種々樂人八十。(中略)且張種々樂器自難波至于京、或哭泣、或儻歌。遂參会於殯宮。」

注16) 林屋辰三郎『中世芸能史の研究』 岩波書店 一九六〇年 頁一九六

注17) 「乃於其処作喪屋而、河雁為崎佐理持 字崎下三字以音 鷲為掃持、翠鳥為御食人雀為確女、雉為哭女、如此行定而、日八日夜八夜遊也。」『古事記・祝詞』岩波文庫 一九五八年

注18) 渡辺仲夫「椎葉神樂発掘 九九 葬送と神楽」『広報しいば』一九八九年五月号、「椎葉村梅尾、葬送の神楽「舞出し」」『民俗と歴史』第三号、民俗と歴史の会、一九九一年、『椎葉神楽調査報告書 第二集』椎葉神楽記録作成委員会 椎葉村教育委員会 編集 椎葉村教育委員会 一九八三年

注19) 渡辺仲夫「椎葉神楽発掘 九九 葬送と神楽」『広報しいば』一九八九年五月号

注20) 『村遊び』西角井正慶 岩崎美術社 一九六六年 頁一九七  
牛尾三千夫 前掲書 一九七七年

注21) 『神道大辞典』平凡社 一九三七年〜一九四〇年  
前掲書 頁一九八

注22) 韓国の別神祭というのは毎年行なわれる村祭とは別に大掛かりで五年、七年、一〇年、一三年毎に行なわれる。それも村によって異なるが、神の託宣に基づいて行なわれるところもある。

注23) 西角井正慶 前掲書

注24) 注25) 注26) 注27) 注28) 注29) 注30) 注31) 注32) 注33) 注34) 注35) 注36) 注37) 注38) 注39) 注40) 注41) 注42) 注43) 注44) 注45) 注46) 注47) 注48) 注49) 注50) 注51) 注52) 注53) 注54) 注55) 注56) 注57) 注58) 注59) 注60) 注61) 注62) 注63) 注64) 注65) 注66) 注67) 注68) 注69) 注70) 注71) 注72) 注73) 注74) 注75) 注76) 注77) 注78) 注79) 注80) 注81) 注82) 注83) 注84) 注85) 注86) 注87) 注88) 注89) 注90) 注91) 注92) 注93) 注94) 注95) 注96) 注97) 注98) 注99) 注100) 注101) 注102) 注103) 注104) 注105) 注106) 注107) 注108) 注109) 注110) 注111) 注112) 注113) 注114) 注115) 注116) 注117) 注118) 注119) 注120) 注121) 注122) 注123) 注124) 注125) 注126) 注127) 注128) 注129) 注130) 注131) 注132) 注133) 注134) 注135) 注136) 注137) 注138) 注139) 注140) 注141) 注142) 注143) 注144) 注145) 注146) 注147) 注148) 注149) 注150) 注151) 注152) 注153) 注154) 注155) 注156) 注157) 注158) 注159) 注160) 注161) 注162) 注163) 注164) 注165) 注166) 注167) 注168) 注169) 注170) 注171) 注172) 注173) 注174) 注175) 注176) 注177) 注178) 注179) 注180) 注181) 注182) 注183) 注184) 注185) 注186) 注187) 注188) 注189) 注190) 注191) 注192) 注193) 注194) 注195) 注196) 注197) 注198) 注199) 注200) 注201) 注202) 注203) 注204) 注205) 注206) 注207) 注208) 注209) 注210) 注211) 注212) 注213) 注214) 注215) 注216) 注217) 注218) 注219) 注220) 注221) 注222) 注223) 注224) 注225) 注226) 注227) 注228) 注229) 注230) 注231) 注232) 注233) 注234) 注235) 注236) 注237) 注238) 注239) 注240) 注241) 注242) 注243) 注244) 注245) 注246) 注247) 注248) 注249) 注250) 注251) 注252) 注253) 注254) 注255) 注256) 注257) 注258) 注259) 注260) 注261) 注262) 注263) 注264) 注265) 注266) 注267) 注268) 注269) 注270) 注271) 注272) 注273) 注274) 注275) 注276) 注277) 注278) 注279) 注280) 注281) 注282) 注283) 注284) 注285) 注286) 注287) 注288) 注289) 注290) 注291) 注292) 注293) 注294) 注295) 注296) 注297) 注298) 注299) 注300) 注301) 注302) 注303) 注304) 注305) 注306) 注307) 注308) 注309) 注310) 注311) 注312) 注313) 注314) 注315) 注316) 注317) 注318) 注319) 注320) 注321) 注322) 注323) 注324) 注325) 注326) 注327) 注328) 注329) 注330) 注331) 注332) 注333) 注334) 注335) 注336) 注337) 注338) 注339) 注340) 注341) 注342) 注343) 注344) 注345) 注346) 注347) 注348) 注349) 注350) 注351) 注352) 注353) 注354) 注355) 注356) 注357) 注358) 注359) 注360) 注361) 注362) 注363) 注364) 注365) 注366) 注367) 注368) 注369) 注370) 注371) 注372) 注373) 注374) 注375) 注376) 注377) 注378) 注379) 注380) 注381) 注382) 注383) 注384) 注385) 注386) 注387) 注388) 注389) 注390) 注391) 注392) 注393) 注394) 注395) 注396) 注397) 注398) 注399) 注400) 注401) 注402) 注403) 注404) 注405) 注406) 注407) 注408) 注409) 注410) 注411) 注412) 注413) 注414) 注415) 注416) 注417) 注418) 注419) 注420) 注421) 注422) 注423) 注424) 注425) 注426) 注427) 注428) 注429) 注430) 注431) 注432) 注433) 注434) 注435) 注436) 注437) 注438) 注439) 注440) 注441) 注442) 注443) 注444) 注445) 注446) 注447) 注448) 注449) 注450) 注451) 注452) 注453) 注454) 注455) 注456) 注457) 注458) 注459) 注460) 注461) 注462) 注463) 注464) 注465) 注466) 注467) 注468) 注469) 注470) 注471) 注472) 注473) 注474) 注475) 注476) 注477) 注478) 注479) 注480) 注481) 注482) 注483) 注484) 注485) 注486) 注487) 注488) 注489) 注490) 注491) 注492) 注493) 注494) 注495) 注496) 注497) 注498) 注499) 注500) 注501) 注502) 注503) 注504) 注505) 注506) 注507) 注508) 注509) 注510) 注511) 注512) 注513) 注514) 注515) 注516) 注517) 注518) 注519) 注520) 注521) 注522) 注523) 注524) 注525) 注526) 注527) 注528) 注529) 注530) 注531) 注532) 注533) 注534) 注535) 注536) 注537) 注538) 注539) 注540) 注541) 注542) 注543) 注544) 注545) 注546) 注547) 注548) 注549) 注550) 注551) 注552) 注553) 注554) 注555) 注556) 注557) 注558) 注559) 注560) 注561) 注562) 注563) 注564) 注565) 注566) 注567) 注568) 注569) 注570) 注571) 注572) 注573) 注574) 注575) 注576) 注577) 注578) 注579) 注580) 注581) 注582) 注583) 注584) 注585) 注586) 注587) 注588) 注589) 注590) 注591) 注592) 注593) 注594) 注595) 注596) 注597) 注598) 注599) 注600) 注601) 注602) 注603) 注604) 注605) 注606) 注607) 注608) 注609) 注610) 注611) 注612) 注613) 注614) 注615) 注616) 注617) 注618) 注619) 注620) 注621) 注622) 注623) 注624) 注625) 注626) 注627) 注628) 注629) 注630) 注631) 注632) 注633) 注634) 注635) 注636) 注637) 注638) 注639) 注640) 注641) 注642) 注643) 注644) 注645) 注646) 注647) 注648) 注649) 注650) 注651) 注652) 注653) 注654) 注655) 注656) 注657) 注658) 注659) 注660) 注661) 注662) 注663) 注664) 注665) 注666) 注667) 注668) 注669) 注670) 注671) 注672) 注673) 注674) 注675) 注676) 注677) 注678) 注679) 注680) 注681) 注682) 注683) 注684) 注685) 注686) 注687) 注688) 注689) 注690) 注691) 注692) 注693) 注694) 注695) 注696) 注697) 注698) 注699) 注700) 注701) 注702) 注703) 注704) 注705) 注706) 注707) 注708) 注709) 注710) 注711) 注712) 注713) 注714) 注715) 注716) 注717) 注718) 注719) 注720) 注721) 注722) 注723) 注724) 注725) 注726) 注727) 注728) 注729) 注730) 注731) 注732) 注733) 注734) 注735) 注736) 注737) 注738) 注739) 注740) 注741) 注742) 注743) 注744) 注745) 注746) 注747) 注748) 注749) 注750) 注751) 注752) 注753) 注754) 注755) 注756) 注757) 注758) 注759) 注760) 注761) 注762) 注763) 注764) 注765) 注766) 注767) 注768) 注769) 注770) 注771) 注772) 注773) 注774) 注775) 注776) 注777) 注778) 注779) 注780) 注781) 注782) 注783) 注784) 注785) 注786) 注787) 注788) 注789) 注790) 注791) 注792) 注793) 注794) 注795) 注796) 注797) 注798) 注799) 注800) 注801) 注802) 注803) 注804) 注805) 注806) 注807) 注808) 注809) 注810) 注811) 注812) 注813) 注814) 注815) 注816) 注817) 注818) 注819) 注820) 注821) 注822) 注823) 注824) 注825) 注826) 注827) 注828) 注829) 注830) 注831) 注832) 注833) 注834) 注835) 注836) 注837) 注838) 注839) 注840) 注841) 注842) 注843) 注844) 注845) 注846) 注847) 注848) 注849) 注850) 注851) 注852) 注853) 注854) 注855) 注856) 注857) 注858) 注859) 注860) 注861) 注862) 注863) 注864) 注865) 注866) 注867) 注868) 注869) 注870) 注871) 注872) 注873) 注874) 注875) 注876) 注877) 注878) 注879) 注880) 注881) 注882) 注883) 注884) 注885) 注886) 注887) 注888) 注889) 注890) 注891) 注892) 注893) 注894) 注895) 注896) 注897) 注898) 注899) 注900) 注901) 注902) 注903) 注904) 注905) 注906) 注907) 注908) 注909) 注910) 注911) 注912) 注913) 注914) 注915) 注916) 注917) 注918) 注919) 注920) 注921) 注922) 注923) 注924) 注925) 注926) 注927) 注928) 注929) 注930) 注931) 注932) 注933) 注934) 注935) 注936) 注937) 注938) 注939) 注940) 注941) 注942) 注943) 注944) 注945) 注946) 注947) 注948) 注949) 注950) 注951) 注952) 注953) 注954) 注955) 注956) 注957) 注958) 注959) 注960) 注961) 注962) 注963) 注964) 注965) 注966) 注967) 注968) 注969) 注970) 注971) 注972) 注973) 注974) 注975) 注976) 注977) 注978) 注979) 注980) 注981) 注982) 注983) 注984) 注985) 注986) 注987) 注988) 注989) 注990) 注991) 注992) 注993) 注994) 注995) 注996) 注997) 注998) 注999) 注1000)

注27) 松浦康麿「隠岐に於ける葬祭霊神楽について」『山陰研究』遠藤文庫 第二冊 一九五五年

注28) 西角井正慶・倉林正次「靈祭神楽考―隠岐芸能の一面―」一九七〇年、倉林正次「芸能の伝播―靈祭神楽考(一)―」一九七二、岩田勝「身ウリ能の形

成と伝播」『山陰民俗』第三六号 山陰民俗学会 一九八一年

注29) 山下文男『昭和東北大凶作…娘身売りと欠食児童』無明舎出版 二〇〇一年

注30) 田中允編『未刊謡曲集 統一四』古典文庫 一九九四年

注31) 岩田勝によると奥州でなく近江であるという「身ウリ能の形成と伝播」『山陰民俗』第三六号 山陰民俗学会 一九八一年 頁三二―三四

注32) 山路興造 翻刻 「戸宇栃木家蔵寛文四年能本」『日本庶民文化史料集成 第一卷』三一書房 一九七四年

注33) 金富賦 著・林英樹 訳『三国史記』下 三一書房 一九七五年 頁二二三

注34) 李杜鉉「葬礼と演劇考―特に珍島ダシレギを中心に―」『韓国巫俗と演劇』ソウル大学出版部 一九九六年 頁二〇五

注35) 『朝鮮王朝実録』卷二二八 成宗二〇年五月条「瑛又啓曰、臣聞全羅慶尚兩道之俗、民間親没、出葬前一日、大設帳幕、置棺於其中、以油蜜果盛於

大盤、奠於棺前、大会僧俗、呈雜戲飲酒歌舞徹夜、雖有識者、亦隨俗為之、其費不貸、故貧者力不能弁而過期不葬此実大累於風教、不可不痛禁。」

注36) 渡辺伸夫「椎葉神楽発掘 一一三 願の紐」『広報しいば』一九九一年一月号

注37) 石塚尊俊『西日本諸神楽の研究』慶友社 一九七九年

注38) 牛尾三千夫『神楽と神がかり』名著出版 一九八五年、渡辺伸夫「椎葉神楽発掘 一一三 願の紐」『広報しいば』一九九一年一月号

注39) 才人(芸人)の組織である神庁に所属されている人々によって行なわれる。神庁というのは朝鮮末期、地方で活動していた職業的民間芸人(才人)

の演芸活動を行政的に管轄した組織である。才人庁、広大庁、神庁、風流房、公認庁なども称する。京畿道、忠清道、全羅道の各郡に設置されたのである。大房を中心としてその下に各道の責任者である都山主、それから各郡の才人庁の庁首がいる。各郡の才人は巫女(巫堂)の伴奏音楽を担当する巫夫の巫俗音楽と当時の才人、広大の娯乐的演芸活動を行政的に管轄したのである。

注40) 李杜鉉 前掲書 韓国精神文化研究院『韓國民族文化大百科事典』を参照。ダシレギ項目を担当したのは任哲宰である。

注41) 李杜鉉採録本では仮喪主が司会役を兼ねて勤める。妻(寺党)は妊婦で腹が孕んでいる。盲目(居士)は経を唱えることを仕事しているひとである。

盲目が隣村の犬が生まれたので唱経を頼まれ、出かけての間に僧が妻(寺党)と戯れる。お腹にいる子供も結局僧との間に出来たことがわかる、そ



れから出産して僧と盲目（居士）がお互いに自分の子だと争う。その隙間で仮喪主が赤ん坊を盗んで逃げ出す。よりなど具体的に表現される。

注42) 小手川善次郎『高千穂神楽』小手川善次郎遺稿出版会 一九七六年 頁八二

注43) 井之口章次『日本の葬式』筑摩叢書、一九七七年。頁三二―三九

注44) 五来重は事例として、「末期の水を口に含ませる時は最早や臨終」（秋田県大曲町―田口松圃氏報）、「茶碗に水、唇を濡らしてやるために半紙を畳んで置く。一本線香、一本を枕元に置いた小机の上に供える。顔には新しい手拭きか白布をかける」（青森県八戸市付近―小井川潤次郎氏報）、「代る

代る死水を唇につける。北枕にねかし、逆屏風をたて廻す」（青森県野辺地地方―中市謙三氏報）、「人呼吸絶ゆる際、与ふる水を末期水といふ、又死して其寢床を北枕に改むを枕直といひ、水を入れたる碗を枕頭に据ゑ、新威者、櫛（神式は櫛）葉を以て其水を死者の口に入る。亦末期水と称す」（高知県長岡郡地方―高村日羊氏報）などをとりあげている。『葬と供養』東方出版 一九九二年 頁七三四―七三八

注45) 武田明『日本人の死霊観 四国民俗誌』三一書房 一九八七年 頁二三

注46) 金聖培『韓国の民俗』韓国文化叢書4 成甲書房 一九八二年 頁二〇

注47) 高岡功『病人、をムシロで囲い、仏、にする話』岩船郡山北町山熊田―『高志路』通巻第三二八号 新潟県民俗学会 一九七三年、『葬送墓

制研究集成』第一卷 葬法 名著出版 一九七九年 所収